夢の国のアリス

神崎亜実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢の国のアリス

【Ｎコード】
Ｎ６９８１Ｃ

【作者名】
神崎亜実

【あらすじ】
「白兎啓太と理想の関係になってください」突然言われたその一言、そして渡された薬。それは選択次第で『幸福』にも『悪夢』にもなってしまう。期限は一週間、アリスは白ウサギを追って夢の世界へと迷い込む。現代物とファンタジーが組み合わさったＢＬ小説。

第一の国　「アリスと帽子屋」

一昨日、とある少年にとって一番大切な人が交通事故にあった。
通学を浮かない顔で歩いている少年、夢原吾吏須（ゆめはらありす）は、ふと空を見上げため息を零した。空は黄昏に輝いており、この町一体を黄金に包んでいた。空はとても綺麗な色の赤をしている。
「お前の血の色もこんな感じに赤かったっけ」
真っ赤な空をただただ黒い瞳で無表情で眺めながら、少し震えた声で吾吏須はそう呟いた。
一昨日の夕方、この通学路に飲酒運転をしていたトラックが桜花学園の通学路に突っ込んできた。ちょうどそこに居た一人の高校生にトラックは激突し、高校生は重体で病院に運ばれ、なんとか一命は取り留めたものの意識が回復する見込みはないとのこと。
そして、その高校生こそが吾吏須の一番の友人で幼馴染の白兎啓太（はくとけいた）だった。
忘れ物をして取りに戻っている間に起きた出来事に吾吏須はかなりのショックを受けていた。自分の知らない間に親友が死にそうになっていたということ。
啓太が待っていたはずの場所には人だかりができており、そこには頭から真っ赤な血を流し倒れている啓太の姿と衝突の衝撃で正面がへこんでいた大型トラック。
『おい、啓太！　大丈夫かよ？　おい、啓太……啓太ってば！』
そう叫びながら啓太の傍に駆け寄った時には、すでに啓太は意識が無く血を流しながらピクリとも動かなかった。もしかしたら死んでしまうのではないのか、もうすでに死んでいるのではないのかと思ってしまうほど、啓太の傷は酷かった。
しばらくして救急車が来た。啓太が病院に運ばれる途中、救急車の中で吾吏須は啓太の手を握りながら、啓太が無事であるようにと、必死に祈っていた。

しかし、吾吏須の願いも虚しく手術後、担当した医師から啓太は昏睡状態に、回復の見込みは１％にも満たないと宣言された。
その絶望的な医師の言葉に、吾吏須はただ泣くことしが出来ず、一生分の涙を流したのではないかと思うくらい一晩中啓太の眠る病室で、吾吏須は啓太の少し温かい手を握りながら泣いていた。
「啓太……」
まるで水が全て無くなってしまった水槽のような逸脱間。空っぽのような感覚。それだけ吾吏須にとって啓太の存在は大きかった。
今さら、どんなに願っても、祈っても一番の友人は戻ってはこない。吾吏須本人も、そのことはよく分かっていた。
手術後の啓太にいくら呼びかけても、名前を呼んでも啓太が起きることはけっして無かったのだから。
吾吏須がここまで、啓太のことを想う理由は幼稚園の頃からの親友だということもある。だがそれ以外の感情が吾吏須にはあったのだ。

――そう『恋愛感情』というものが。

可笑しいとは分かっている、幼馴染にしかも同性に恋愛感情を抱くだなんて、分かっていたからこそ吾吏須は啓太に想いを告げなかった。
もしも、この想いを告げたのならば、きっと二度と笑顔は見れないと、もう今までの関係には戻れないと、自分は軽蔑されるのではないのかという不安があったからだ。
吾吏須がこの感情に気付いたのは１５歳の時、普通以上に啓太のことばかりを考えていて、そして触れてみたいと思ってしまったのが始まり。
それから、毎晩悩んで眠れない夜もあったりした、何故自分は啓太のことがこんなに気になるのだろう。どうして、啓太にもっと近付きたいと願ってしまうのか。

そしてようやく出た答えが『夢原吾吏須は白兎啓太のことが好き』というものだった。
「なんで、啓太のこと好きになっちまったんだろう」
もしも啓太のことを忘れられるのならば、忘れてしまいたい。そして、普通に女の子を好きになって付き合って結婚して幸せな家庭を築きたい。
だけど、忘れることなんてできなかった。それだけ吾吏須にとって啓太との思いでは大切で、啓太のことが好きで、それにきっと啓太は吾吏須の初恋の人なのだから。
初恋が男だなんて、人生半分くらい終わっているなと思ってしまうのだが。
記憶を消す薬があれば、吾吏須は喜んでその薬を買うだろう。そして辛いことなんて綺麗さっぱり忘れて、新しいことを見つける。
だけど、現実にはそんな便利な薬は無い。
ここまで啓太の存在が自分にとって大きいとは思っていなかった。こんなに辛くなるとは吾吏須も予想していなかった。
もしも、時間が戻るのならば啓太と会いたい。そして自分の本当の気持ちを話したい。そうすれば、この胸の喪失感も埋められるのかもしれない。
ふと、学生鞄から取り出した写真には笑顔の吾吏須と啓太が写っている。その写真から分かるように二人はとても仲が良かった。
腕を組みながら、元気いっぱいの笑顔でカメラに向ってピースをしている姿は、とても微笑ましく心が和む写真だ。
しかし、もうこうやって二人で笑ったり高校生らしく話しをしたり、じゃれ合ったり、喧嘩したりすることも無いのだろうか。そう考えると、吾吏須の心は押しつぶされてしまいそうなくらい辛くなる。
「どうして……ッ！」
吾吏須の瞼から大粒の涙が零れ落ち、頬を伝い地面に染みを作っていく。

写真を持っている手は、強く握りしめられている。もう、啓太には会えないのだという真実に、吾吏須は耐えられなかった。
一番大切な人がもう自分の前には居ないということ。それは吾吏須にとっては苦痛でしかなかった。いくら現実逃避をしても現実は容赦無く吾吏須の心を痛めつけていく。
「会いたいよ……啓太」
そんな悲痛の悲鳴に似た声は、この赤い空に煙のように消えていってしまった。
すると強い風が吾吏須の体を震わせた。９月の冷たい風はブレザーの下がシャツだけの体にはさすがに少しキツイ。
その風の冷たさに、手がまるで作り物のように固まってしまった。また大きな風が吹く、すると。
「あっ！　写真……が！」
吾吏須の握っていた写真が空に舞い、まるで何かに操られているかのように普段あまり吾吏須が行かない路地裏の方に飛んでいってしまった。あの写真だけは失うわけにはいかない、そう思い風に飛ばされてしまった写真を橋って追いかける。
しかし、吾吏須は普段学校では天然記念物に指定されてもいいほど体育の成績が悪い。他の科目は何時も上位に居るのだが、体育だけは持久力もなければ５０メートル短距離走１０秒という女子と同じくらいの速さだ。
当然なかなか写真を掴めずさらに裏路地の奥まで走っていく。
「くそう、俺の写真……っ！　よし掴んだ！　って……へ？」
ようやく写真を掴んだかと思ったらドテというものすごい音と共に吾吏須は地面に顔を打ち付けた。どうやら地面に倒れていたゴミ箱で躓いてしまったらしい。
「うぅぅ……痛ってぇ、マジで痛い」
手元を確認してみると、どうやら写真だけはどうやら死守できたらしい。その感動に吾吏須はとても笑顔になる。その笑顔はとても可愛らしく、そしてとても喜びに満ちたものだった。

起き上がり、制服についた砂を払うとため息をつき写真を鞄の中に大切に入れる。
そして、顔をあげるとそこには古いアンティーク風潮のお店があった。
裏路地に不自然にあるこの店は、まるで何かの魔法の薬でも売っているのではないのかと思ってしまうほど、不気味とまではいかないが、とてもファンタジーな雰囲気があった。
こんなところに店などあったかと思考をめぐらせている吾吏須は、その店の看板を見てみた。
「夢屋…？」
洋風な店なのに、何故か漢字でお店の看板には『夢屋』と書かれていた。多少ミスマッチな看板を眺めているとまた大きな風が吹いた。
その風はまるでこの通路に吸い込まれていくかのように、倒れたゴミ箱が動くほど大きなものだった。すると吾吏須はまるで何かに呼ばれているような感覚になる。
実際、声はもちろん風の音しか聞えないはずなのに夢屋を見ていると、何故かその店に呼ばれているかのような不思議な感覚。
吾吏須は一歩づつゆっくりと夢屋のある場所に、まるで魔法か何か言葉では説明できないような力で引き寄せられているかのようにフラフラと歩いていく。
ドアノブに手をかけ、ゆっくりと押していく。その感覚はまるで宝箱を開けるかのような好奇心と、この先にあるのは闇なのかもしれないという不安と、もしかしたら光かもしれないという希望。
そんな思いを抱きながら空けた扉の先は。
「すごい……」
――まさにファンタジーという言葉はこの為だけにあるのだと言われてしまえば素直に納得してしまう世界だった。

この不思議な空間を表現するのならば『ファンタジー』かもしくは『異世界』という言葉が相応しいだろう。
昔、母親に読んでもらったおとぎ話を思い出すような空間に、吾吏須は思わず息を飲んだ。雑貨屋なのだろうか、棚の上にはたくさんの小瓶に液体のようなものが入っていたり、飴のような直径１センチほどの円形の塊が入っているもの。それだけならばまだ普通だ、しかしこの液体や球体は普通ではなかった。
まるで、魔女の作った魔法の薬のような緑色や赤い色の液体は、最初は赤なのだが段々と黄色い色に変化していく。青い飴玉のような球体だって色がピンクへと変化していく。
他にも沢山の煌びやかなアクセサリーや、全て針の一が違う時計に、中央のテーブルには大きなケーキのような形をしているキャンドルまである。
そんな今の日本では少しどころかとても不思議な空間を見ていると奥のカウンターに座っている人間が誰かが入って来たことに気付いたのか声を上げた。
「おやおや、めずらしいお客さんだ」
そう言って出てきたのは、これもまたこの店と見事にマッチしている成人男性の姿だった。きっとこの店の主人なのだろう。
黒く、６０センチはあるのではないのかと思うほど長いシルクハットに沢山の飾り。飾りといっても普通に見かける飾りとはまったく違った。薔薇やらトランプやらキャンドルやらと子供に上げたら大喜びするようなほど豪華な帽子だった。
服は、真っ白なコートに赤黒いラインがとても印象的で、裾が膝下まで届くほど長いのでスーツと言うべきかコートと言うべきか悩んでしまう。その服にもとても豪華な飾りつけがしてあった。
しかし、豪華と言っても仮装パーティの時に着ればいいという意味で、どこかの普通のパーティには場違いな格好だ。
銀色の綺麗な髪は肩より少し下ほどの長さの髪はとてもサラサラとしていた。どう考えてもその髪の色は染色した色ではない、とい

うことは外人なんだろうか。
眼鏡の向こうには少し恐いと思ってしまう赤い瞳が吾吏須の方をじっと見ている。
「ようこそ、子猫ちゃん」
「こ、子猫ちゃんて……」
主人は笑顔でそう言うと、吾吏須はとても微妙な気分になった。きっと女性ならばこの笑顔で『子猫ちゃん』などと言われれば惚れてしまうだろう、それは男である吾吏須でも分かるほど魅力的だった。
しかし、生憎吾吏須の性別は男性であってこの主人の笑顔にときめかなければ『子猫ちゃん』などと言われて嬉しいわけでも、むしろ気持ち悪いと思ってしまう。
このことから、きっと吾吏須は同性愛者な訳ではなく、啓太限定で同性愛者なのだろう。吾吏須も啓太意外の男性と一緒に居るのと女性と一緒に居るのどちらが嬉しいかと問われれば迷いなく女性だと答えるだろう。
啓太限定だなんて可笑しいと思っていたのは最初の時期だけで、今ではそこまで気にすることは無くなっていた。
「何か欲しいものがありますか？」
「あ、いや……たまたま立ち寄っただけで。此処は『夢屋』って言うんですよね。何を売っているんですか？」
見回してみても、ファンタジーな世界と小物がおいてあるだけで、これだけでは此処がどんな店なのか分からない。主人は『あぁ』と呟き笑顔で答えた。
「此処は名前のとおり『夢』を売っているんですよ」
「ゆめ……？」
「そうです『夢』を売っているんです、たとえば……」
すると、主人は近くにあった飴玉のようなものが入っている袋を指差した。
「この飴玉は『自分の願った夢が見れる』薬です。その左側にある

のが『夢の続きが見れる』薬ですね」
「それって本当に見れるんですか？」
さすがに、薬の効果を説明されてもすぐに信じられるわけでもなく。さすがに疑ってしまう、そんな便利な薬がこの世界にあるのかと。いくらなんでも普通の人間は信じられないだろう。
すると、吾吏須の問いに主人は先ほどの笑顔を絶やさずにこやかな表情で。
「はい、効果は保障いたします」
と、自信高々に言った。
「保障……見れなかったらどうするんですか？」
「それはありえません、この薬は本物で効果も抜群です。決して効かないなどということはありません」
よくまぁ、そんな自信たっぷりに言えるものだと吾吏須は思いながら、主人の顔を見た。しかしその顔は先ほどとまったく変わらない笑顔。
「何か気になる商品がございましたらお申し付けください」
主人はお辞儀をしカウンターに置いてあった紅茶を飲み始めた。綺麗な花柄のカップは、何故か主人が手にすると輝かしさが増しているような気がする。
カッコイイ人間は何をしても似合うのだなと、少し忌々しいかもしれないと思いながら吾吏須は少し店内を見て回ろうとカウンターの近くにある棚の方へと向おうとした。
「あ、その辺の棚は少し危険な薬が置いてあるので注意してくださいね」
主人が注意しようと、吾吏須の近くに行こうとした、すると。
「あ……っ」
主人の持っていたカップに入っていた紅茶が、主人が吾吏須に注意しようとした時に零れてしまった。あまりたいした量でなかったのが幸いだった。
「すみません、熱くありませんでしたか？」

すぐにカウンターの上にあった布巾で制服の紅茶を拭う。
「だ、大丈夫です」
紅茶は少し冷めていたのか、それほど熱くはなかった。
「もうしわけありません、すぐにクリーニングに……」
「大丈夫ですから……そんなたいしたことじゃないですし」
安心してくださいと言う吾吏須に、主人はかなり申し訳無さそうな顔をしていた。格好は少し普通ではないが、性格は普通なのだなと密かに思ったことはそのまま心の中に溜めておくことにする。
「そうですか……でもそれでは申し訳ありません。そうです、店の薬を一つ貴方に差し上げましょう！」
名案だといわんばかりに主人は少し嬉しそうな声で言った。すると先ほど吾吏須が見てみようと思った棚に置いてあった小さな小瓶を吾吏須に差し出した。
小瓶の中には、綺麗なピンク色の液体が入っていた。
「この薬は？」
「これは『幸福と悪夢』の薬です」
「幸福と……悪夢？　なんで悪夢なんだ」
幸福な夢ならば、何故『悪夢』までついてくるのだろうか。それならば最初から悪夢と書いておけばいだろう。
「それはこれを飲んだら分かると思うのですが、そうですね……今言えることは幸せな夢は時として悪夢になるものです」
主人の説明に、吾吏須は意味が分からず首を傾げた。それに飲めば分かるというのは少し酷いのではないだろうか。普通ならば薬の効果をちきんと説明するべきだろう。
「いいですか、これは少々危険な薬でもあります……ですが、貴方の想いを叶えるのには最適な代物だと思いますよ」
「俺の願い……？」
すると、主人は笑顔のまま吾吏須に顔を近づけた。そして耳元で囁く。
「貴方のお友達、白兎啓太との想いを結ぶ為に……ね」

主人の言葉に、吾吏須は一瞬固まってしまった。何故この人間は自分のことや啓太のことを知っているのだろう、そして何故自分が啓太に恋をしていたことを知っているのか。
吾吏須は啓太が好きだということを誰にも、ましてやこんな妖しい主人にも言っていない。ずっと心の中だけに入れておいたし、そんなそぶりを見せたことだって一度と無い。
目を見開いている吾吏須を見ながら主人は笑った。きっと主人も何故吾吏須が固まっているのか分かっているのだろう。
「どうして……」
「それは秘密です、ですが保障いたします。それは貴方に幸福を与えてくれるでしょう。ただそこから悪夢になるかは貴方次第です」
笑顔が恐いと感じたのは始めてだった。
主人は一番最初吾吏須に見せた笑顔とまったく変わらない表情だ。しかし、吾吏須にはその笑顔が恐怖に感じる。この人物は自分の全てを知っているのではないのかと思ってしまう、全てを見抜かしているような。
「そろそろお帰りにならないと、夜が訪れてしまいますよ。夜は全てを闇へと飲み込みます。急がないと帰れなくなってしまうかもしれませんよ？」
「……ッ！」
その言葉が恐くて、吾吏須はすぐさま主人に渡された薬を持ちすぐさま扉を乱暴に開け外に飛び出した。何故、あんなに綺麗な笑顔の主人の言葉が恐いと感じたのかは吾吏須本人も分からなかった。
しかし、何故か帰らなくては、早くあの場から……否、あの主人から離れなければならないと五感全てが訴えた気がしたのだ。
裏路地を出ると、どうやらもう夜らしく外灯が付いていた。空もこの裏路地に入った時のような赤い空ではなく、漆黒の空となっていた。
「なんなんだよ……あのオッサン、何で俺のこと知ってんだよ」
呟きながら走ってきた裏路地を見たが、あの店の姿は見えなかっ

た。

☆

家に帰ると、何時もどうり誰も居なかった。吾吏須の両親は現在共働きで今は二人とも長期の出張中で家には居ない。
吾吏須が高校に上がった頃からで、今この大きな家には吾吏須一人しか住んでいない。だが、その方が吾吏須も気楽でいいし、なにより昔から両親は忙しいから慣れてしまった。
二階にある自分の部屋へと向かい、扉を開ける。鞄は机の上に置き、ブレザーを脱ぎベットに投げ捨てると、自分もベットに大きな音を立てて倒れこんだ。
「なんだったんだろうな……」
吾吏須はうつ伏せになりながら、今日起きた不可解な出来事を思い出していた。
不思議な店に妖しい薬、そして自分のことを知っていた主人。今思うと、あの店は幻ではなかったのかと考えてしまう。
しかし、手で握っている小瓶が、あれは幻などではなかったと語っていた。手に持っている小瓶を見ながら吾吏須は呟く。
「これが、俺の望みを叶えてくれる薬……そんなこと、あるわけ」
自分と啓太との想いを結ぶ、それはつまり啓太が目覚めなければならない。だけど啓太が目覚める可能性は0に限りなく近い、それなのにどうやって啓太を目覚めさせるのか、吾吏須は不思議でならなかった。
だけど
「これで、啓太に会えるなら……」
少しの可能性にかけてみたい、啓太にもう一度会って想いを告げたい。
「啓太……」
一番好きな人間の名前を呟き、吾吏須は身体を起こしベットの上

に座る。そして、持っていた小瓶の蓋を開けた。
「どーせ、偽物だろうし。別に大丈夫だよな！」
そう自分に言い聞かせ、自分の中にあった微かな不安をかき消した。そんな不安よりも啓太に会えるかもしれないという希望の方が吾吏須の中では大きかったが、やはり変な主人から貰ったのだから不安がある。
決意が固まっているうちに瓶の中に入っていたピンク色の液体を一気に飲み干す。すると、まるで苺のような甘い味が口の中に広がり、色のわりには意外と飲みやすかったことに少し驚く。
飲み終わった小瓶を近くの机に置こうと手を伸ばした時、急に視界がぼやけた。
「え……ッ！」
身体に力が入らなくなり、急に睡魔に襲われベットに倒れこむ。さっきまでまったく眠くなどなかったのに何故、もしかしてこの薬は本物だったのだろうか。
瞼が重くなり、視界が真っ暗な世界へと包まれていく。そこで吾吏須の意識は途絶えた。

第二の国　「夢の国」

人間を眠りの世界から引きずり出すジリジリと煩い目覚まし時計の音が聞えた。
もう朝なのだろうか、重たい瞼を開ければカーテンの隙間から差し込む太陽の光が吾吏須に朝だと告げていた。
「眠い……」
起きる気がしない、このままずっと眠っていたいが今日は学校の為、仕方なく起きる。朝が苦手な吾吏須はゆっくりとベットから起き上がり、おおきなあくびをした。
ようやく頭が起動して来た頃、吾吏須は気付いた。昨日飲んだ薬の効果はいったいどうなったのかと。
「そういや、何も変わってないよな」
部屋を見回しても、まったく薬を飲む前と変わっていなかった。しかし、あの薬の入っていた小瓶は何処にも無かった。
「やっぱり、アレ……偽物だったのか」
微かに、あの薬に期待していただけあって少し残念だった。やっぱり、もう啓太に会える期待は無くなってしまったのだということ、そしてまた喪失感がある世界に逆戻りだということ。
何時かは、この喪失感を埋められる日が来る。だけどそれはいったい何年先のことなのだろう。もしかしたら一生埋められない可能性だってある。
しかし、ここでくよくよしていては駄目だと思い、吾吏須はさっそく学校の準備をしようと鞄を見た。
――ピンポーン
高い電子音は、この家のドアの前に誰かが来たことを知らせた。誰が来たのだろうと吾吏須は自分の部屋から出て誰も居ないリビン

グを抜けドアの前に着いた。
「迎えにきたぜー吾吏須！」
その声に、吾吏須は一瞬戸惑った。その声に聞き覚えがあったからだ、それも此処には居るはずのない人物の声。
「あーりーすー！　もうすぐ学校だぜ、早くしろよ」
何故此処に彼が居るのかは分からない、でもたしかに彼は自分の家のインターホンを押していた。吾吏須が出てこないからか、何度もインターホンを鳴らすドアの向こうの相手。恐る恐る、鍵を開け、ドアノブを掴む。
このドアを開けるのが恐い、だけど同時に微かな希望があった。吾吏須は覚悟を決め、ドアを開ける。
「どうして……ッ！」
ゆっくりとドアを開け、その向こうに居る人物を確認すると、吾吏須は信じられないといった様子で呟いた。
「おはよ……って、どうしたんだよ吾吏須？　そんな化け物見たような顔して」
その向こうに居たのは、一番吾吏須が会いたくて、愛しいと思っていた人物だった。
「啓太？　なのか……」
たしかに、その人物は啓太だった。桜花学園の制服に、短く茶色い髪に、自分と同じ真っ黒な瞳。そして何時も吾吏須が見ていた笑顔。
何故、どうして病院に居るはずの啓太が自分の家の前に居るのか。どうして何時もと同じく一緒に学校に行こうと誘っているのか。どうして、どうして。
『どうして』や『何故』という言葉で、吾吏須は自分の頭が埋め尽くされるような気がした。少し不自然な吾吏須に疑問を持ったのか、啓太は少し心配そうに吾吏須に声をかける。
「そうだけど、吾吏須どうしたんだ？　具合でも悪いのか？」

――同じだ、何時も俺を気にかけてくれる啓太と同じ。

「なぁ、啓太。お前……目覚ましたのか？」

「へ？　目覚ましたって、何が？」

「お前交通事故にあっただろ！　それで昏睡状態になったんじゃないのかよ！　回復の見込みは１％にも満たないって！」

「待った、交通事故？」

吾吏須の永遠に続きそうなマシンガントークを啓太が止めた。両手でストップのサインをしながら、意味の分からないことを言っている吾吏須に問いかけた。

「俺は交通事故にあってないし、それに交通事故なんて起きてないぜ？」

「そんな、だって俺は……」

たしかに啓太が血を流して倒れているのを見た、啓太の血に触れた。忘れるはずがない、あの感覚を、このまま啓太は死んでしまうのではないのかという不安をたしかに感じた。それなのに啓太は今自分の目の前に居て笑っている。

そこで、吾吏須は思い出した。あの主人のことを、もしかしたらあの薬は本物だったのではないだろうか。だけど現実的にそんなことありえないんだ。啓太が目覚めるなんて、そんなこと。

それにどうやら、この啓太は事故があったことすらも知らない。否、事故が起こっていないことになって居るというのが正しいだろう。

立ち尽くしている吾吏須を見て、啓太は吾吏須の肩に手を置く。それはきっと吾吏須を安心させる為の行為だろう、啓太の手の体温を感じた時自然と吾吏須の混乱も収まっていた。

「吾吏須、お前きっと変な夢でも見てたんじゃないのか？」

夢なわけない、吾吏須はそう声に出して言いたかった。何故なら啓太が昏睡状態になったと知らせを受けた時、これは夢だと信じたかった。だけど、啓太が昏睡状態になったのは紛れもない真実なの

だから。頬を抓ろうと、部屋のベットで寝て、起きれば啓太が向えに来てくれるなど、何度も現実逃避していた。だけど、啓太が昏睡状態になったのは現実でのことだった。
　それでは、今自分の目の前に居る啓太は自分の夢の啓太なのだろうか。これは夢なのだろうか、ならば吾吏須はこの夢が一生覚めなければいいと思った。
「ところで、もうすぐ7時５０分なんだけど」
「へ？」
　時計を見てみると、たしかに時間は7時４８分だった。学校のＨＲが始まるのは8時ジャスト、此処から学校まで徒歩で１５分ほど。
「本気で遅刻寸前じゃん！　おい啓太、そこで待ってろ着替えてくるから！」
「はいはーい」
　玄関で手を振っている啓太は、多少苦笑が混じった表情だった。吾吏須はすぐさま自分の部屋に戻り制服を着始める。そして、机の上に置いてあった鞄を握りドタドタと階段を下りた。
「走るぞ！　あの煩い担任にまた嫌味をネチネチ言われちまう！
「先生の嫌味が嫌だったらもっと早く起きろよ」
「うるせぇ！　俺は低血圧で朝が一番弱いんだよ！　お前みたいな体育会系みたいに朝6時に起きるなんて超人みたいな能力は無い！」
「それは日頃の生活習慣の問題だろ、だいち夜ちゃんと眠れば起きれるし、それに遅くまで起きてるから身体が発達しないんだよ。だから身長が小さい……」
「あー！　言いやがったな！　人間の肉体的コンプレックスを突くなんざ外道だ！　お前に身長１６５センチ未満で１７歳の男の気持ちが分かってたまるかあぁ！」
「まぁ、俺は吾吏須の方が身長小さくてよかったけどな」
　啓太が、少し楽しそうな声で言った。少し後ろですでに息が上がっている吾吏須が苦しそうに言う。
「てめ、喧嘩売ってんのか！　とりあえず肉体的対戦は無理だけど

勉強だったらかかってこい！」
「あはは、だって俺の方が身長大きければ吾吏須を見下ろせるじゃん！」
その言葉に、吾吏須の何かがプツンと音を立てて切れた。
「お前最低だな！　見下ろせるってなんだよ、俺のことを『愚かな愚民よ、米が無ければパンを食べればいいじゃない』という日本人として最低なことを考えながら見下してんのか！　お前生意気だ！」
「なぁ、吾吏須。意味分からないし『愚か』と『愚民』で意味が二重してる」
「うるせぇな！　分かってるよお前に指摘されなくても！　ただ間違って言っただけなんだよ！」
啓太の後を必死に走る吾吏須と、その前を余裕で走る啓太。それは啓太が居た時と同じ朝だった、その時の吾吏須には、もう此処がいったいどんな場所だなんてどうでもよかった。ただ啓太が居る幸せに浸っていた。
『あたりまえ』がこんなにも幸せなことだったなんて、なんで今まで気付かなかったんだろう。

第三の国　「嫌いな人」

吾吏須達がなんとか教室に着いた時には、時計は既に7時59分だった。あまり運動が苦手で持久力が無い吾吏須にとっては、このタイムはかなり奇跡的なものだった。

しかし、啓太はほとんど息が上がっておらず、学校に着いた時は爽やかな笑顔で後ろから必死に走ってくる吾吏須を見ていた。

啓太は陸上部に入っている為、部活では毎回5キロは走っているので、吾吏須の家から学校までの距離など簡単なものだった。

「啓太…おま…えハァ……絶対……に！おか…しい！……ハァ…ハァ…」

教室についた時、すでに吾吏須は瀕死の状態だった。呼吸を整えながら汗一つかいていない啓太を見ながら疑問をぶつけていた。

「俺は何時も走ってるから」

「だけど、いくら秋といっても汗一つかかないのはおかしいだろ……あー疲れた」

「吾吏須って、本当に持久力無いよな……まぁ、昔から勉強熱心だからね」

「あたりまえだ、外で運動して無駄な汗かくよりは教室でパブロフの犬の条件反射の本を読んでいる方が時間を有効的に使ってる」

意味の分からない言葉を出された啓太は、お手上げかというように両手を挙げた。

「吾吏須、俺そういうパタロハだかパイフトみたいなのは分からないって」

「パブロフだよ、パ・ブ・ロ・フ！　最初のパしか合ってないだろが！　いいか、これはかなり勉強になるんだぞ……ッ！　って聞いてないだろ」

「だから、俺は本当にそういうのは……おい、吾吏須！　先生が来た！」

教室の外から足音が聞えた。その音が聞えると今まで別の席で友達と話していた生徒が全員自分の席へと戻った。何故かというと、この2年5組の先生である松山三月（まつやまみつき）は鬼教師として桜花学園では有名だからだ。

松山の担任するクラスに入った生徒は皆、松山の恐ろしさを象徴して『鬼』と呼ぶ。何故なら松山が教室に入れば、猿のように騒がしかった生徒が一瞬で静まり。その氷点下零度の眼で睨まれれば、心臓の弱い生徒は失神してしまうほどに恐ろしい先生なのだから。

厳しく表情の読めない眼鏡の奥の瞳に、冷淡とした表情。それだけならば愛想の無い先生だけで済むことだが、鬼と恐れられる理由は勉強に対する容赦ない姿勢。もしも、松山の授業中に話でもしようものならば鋭い指摘と嫌味、そしてさらに課題というトリプル攻撃がくる。その冷淡な声は『恐怖』というものを感じさせ反論しようものならば罰としてさらに課題を山ほど課せられる。

しかも、少し余所見をしただけで松山はその生徒の机にチョークを投げつけてくる。しかもチョークは見事に粉々になるというから驚きだ。

たしかに厳しい熱血教師なのかもしれない、ただ元の性格のせいかそれは情熱を通り越して『恐怖』を感じさせるのだから困ったものだ。

コツコツという革靴の音が廊下に響き渡る、その足音はまるで死が近付いてくるような気がした。生徒達全員が顔に『恐怖』の表情を浮かべている。

しかし、どうやらそれは松山の足音ではなかったらしく2年5組の教室を素通りして隣の6組の教室の扉が開く音がした。

「よかった、先生じゃなかった……」

啓太だけではなく、他の生徒も安堵の言葉を漏らす。

「分かったか啓太、これが条件反射だ。足音が聞えただけで、たとえそれが松山のもので無くても生徒は全員席につく。パブロフは犬を使って実験した――」

「夢原吾吏須」
吾吏須がこれから、パブロフの実験方法を話そうとした時、低い声が聞こえた。それは吾吏須もよく知る松山のものだった。
教室の扉の方を見ればそこには似合わないオールバックと眼鏡の下にある氷点下零度の冷たい瞳があった。松山は黒板の上にある時計を指差しながら低い声で言った。
「すでに時計は八時を回っている。ならば席につき黙って担任が来るのを待つというのが常識というものだろう？　それとも、一番時計の見える位置に居ながら時計の文字盤も読めないのならば今後の私の授業に差支えが無いように今すぐ眼鏡を買ってこい」
「すみませんでした、先生」
何故足音とドアを開ける音が聞えなかったのか、たしかにそれも気になっていたが松山の嫌味への怒りの方が今の吾吏須の感情の中では大きかった。
吾吏須の席は、最悪なことに松山の席の目の前なので、黒板の上にある時計はたしかに見やすい。
「さて、私が来ても喋り続けていたのは何回目だろうな？　私の記憶している中では、これで４回目だ」
「はい、そうです」
「物覚えが悪いのにも限度があるな低知能な生物でも４回注意されれば学ぶ、君はどうやらそれでもできないらしい。君のような子供は罰を与えなければ復習しないようだ。今度注意された場合は罰則を与える」
「……ッ！」
「返事は？　どうした、言語力すら失ったのか？」
「はい、分かりました先生……ッ！」
この松山という教師は、何故か吾吏須に対してだけ厳しい。他の生徒にも厳しいのだが、吾吏須に対してだけは一段と嫌味を言ってくる。
吾吏須以外の生徒が喋ったからといって、さすがに１００回もす

れば罰則を与えられるだろうが、何故か吾吏須はたった5回で罰則を与えられる。隣の席に居る啓太だって最近17回目の注意を受けたが未だに罰則を与えられたことは無い。
「それでは出席をとる。赤坂！」
嫌味も終わったらしく、ようやく解放されたと思った吾吏須はふと窓の外を見た。外は晴天でとても清々しい、吾吏須の席は窓側なので日光を浴びるにはちょうどいい場所だった。

――まったく、あの陰険根暗教師がッ！

心の中で松山への愚痴を呟き何時か絶対復讐してやろうと思った時、視界に入った人物に吾吏須は口を開けたまま5秒間固まった。できれば嘘であると願いたかったが、どうやら嘘ではないらしい。
中庭に、何故かあの夢屋の主人が立っていた。しかも最初に会った時と同じようなファンタジーな格好だ。
「夢屋ッ！」
机から立ち上がりつい叫んでしまった。しまったと思った時はすでに遅かった。吾吏須の方を出席を取っていた松山が鋭い目で睨んでいる。
「そうか夢原、どうやらお前は私のHRを邪魔したいらしいな」
「ち、違います！　あの、中庭に不信人物が……ッ！」
松山が窓の外を見ると主人は手を振っていた。それはあきらかに吾吏須に向けられているものだった。
「夢原、お前の知り合いか？」
「全身全霊で否定させていただきます」
すると、こちらの状況をまったく知らない主人はお気楽そうな声で二階にある吾吏須の教室に届くほど大きな声で叫んだ。
『あーりーすー！　どうしたんですか？　そんな恐い目をして、私と貴方の仲じゃないですか！』
嗚呼、なんであの変人はこうも俺に不利なことをするんだろう。

そして何故俺の名前を知っているんだよ、と思いながらものすごい表情で吾吏須は拳を握り締めながら主人を見た。他の生徒も窓の外を見て、あの変人と吾吏須はいったいどういう関係なんだろうと考えているのか話し声が聞える。
「お前の名前を呼んでいるようだが？」
「別人ではないでしょうか？」
「このクラスに『吾吏須』という名前の人間はお前しか居ない。ちなみに私は全ての生徒の名前を覚えているが『アリス』という名前の人間はお前しか居ないな」
「あー思い出した！　従姉妹の親戚の兄嫁の友人の友人の簡単に言えば他人の大石君だね！　すみません先生、ちょっと話をしてきたいので失礼いたします！」
　このままでは、事態が収まらないと判断した吾吏須はすさまじいスピードで中庭へと向った。松山が何か言った気がするがこのさい気にしないことにした。
　ドタドタと凄い音で中庭へと向った吾吏須は、すぐさま主人の腕を掴み目立たない場所へと連衡した。
「吾吏須、ようやく会えました！　あれ、何処に向うんですか？」
「ちょっと黙っててくんないかな大石君！　今俺すごい話したいことがあるんだ！」
「私の名前は大石ではありませんよ吾吏須？　まだ私は貴方に自己紹介していませんでした」
「それは俺だって同じだよ、てか何でお前は俺の名前知ってんだよ！　とにかくこっちにきやがれ！」
　普段ではありえないような力で主人の腕を引っ張り、そのままできるだけ目立たない場所を探そうと学校の中に入っていった。
　仕方ないので階段下で話そうと足を進めた。
「おい！　夢屋、お前冗談はその服だけにしろってんだよ！　最初は外見に似合わずお前もちゃんとした思考があるんだなーと思ったけど前言撤回だッ！」

「酷いですね、そんなこと思っていたんですか？」
「今この場でアンケート採ったら９０％の人間が『思う』って答えるよ！　それよりなんの用だ！」
今まで思っていたことを全て破棄捨てた吾吏須は、ギロッと主人を睨んだ。その目に主人は爽やかスマイルで。
「そんな情熱的な視線で見つめられると照れますね」
後ろに薔薇とスマイル０円という文字でも出そうな主人に、吾吏須の怒りは頂点に差し掛かっていた。さすがにこの年齢で犯罪者になりたくないので必死に理性が右手の拳を主人の頬を殴らないように止めていた。
「おやおや……つれないですねー吾吏須は。さて、今一番聞きたいことがあるのは吾吏須なのではないですか？」
「え……ッ」
その言葉に吾吏須は正気に戻った。少しゴタゴタしていたせいで啓太のことや事故のことを忘れていた。
「あんた、やっぱり啓太が居るのはあの薬のせいなのか？　なんで啓太が居るんだ！」
「やはり気になっていましたか」
昏睡状態で病院に居るはずの人間が、今朝自分の家の前で自分を待っていたら誰だってそう思うだろう。そう思わない方がおかしい。
すると、帽子屋はこれまたお気楽そうな声で言った。
「それではお答えしましょう、此処は貴方の夢の中です」
さて、いったいどれだけの人間が今目の前に居る謎の人物の言うことを信じられるだろうか。そもそも、夢の中まで松山に嫌味を言われるなど本当に不運だと吾吏須は自分を呪いたくなった。
「夢……？」
「はい、夢です。とはいうものの、とても現実味のある夢なのですが。さて……ではあの薬の説明をさせていただきます」
先ほどのお気楽そうな声とは裏腹に、とても重要な話をするかのような低い声になった。

「この薬の期限は一週間、来週の日曜日の午後7時までです。その期限の間までに白兎啓太と『理想の関係』になってください」
「理想の関係……って、何だよ」
「それは貴方がよく知っているとおり、恋人同士という関係です」
「こ、恋人？！」
「その間に恋人同士になれなければ、貴方は夢から目覚めて前のような白兎啓太の居ない世界に戻ってしまいます。ですが恋人同士になれた場合は……」
一瞬間を置いた主人に少し苛々しながらも、吾吏須は主人を見ていた。
「それは、その時のお楽しみです」
「はぁ？！」
「やはり、楽しみは最後まで取っておかないといけませんからね。知りたい場合は早く白兎啓太と恋人同士になってください」
まるで宝探しをさせて、その宝物を早く見つけてもらいたい子供のようなとても無邪気な笑み。しかし、それは吾吏須にとっては苛々する原因にしかならなかった。
「ですが、恋人同士になった暁には……それは必ず『幸せ』になります。しかし、失敗すればまた白兎啓太の居ない世界に戻ります」
「だから……悪夢になるか、幸せな夢になるかは俺しだいってことか」
「そうです、それではこれからの一週間……頑張ってくださいね」
すると、主人は帰ろうと玄関の方に続く廊下を歩こうとした。
「待てッ！　あんた、本当に何なんだ？　薬だって、普通じゃ考えられない効果だし……ッ！」
普通の一般的思考の持ち主ならば誰もが問う質問、それは吾吏須も同じだった。だが主人は笑顔のまま意味不明なことを言い始めた。
「それは、私が夢の住人だからです。夢の住人は人間に夢を与えます、それが夢の住人の仕事なのです。あと、私のことは帽子屋とでも呼んでください」

「はぁ？　夢の住人って何だよ！　あんたは毎回分けの分からないことばかり言いやがって！」
「ですから『あんた』ではなく、私のことは『帽子屋』と呼んでください。私は貴方の夢の中ではこの近くにある帽子屋を営んでおりますので」
　どうやら、それだけは譲らないようだ、もうすでに本名を聞く気すらならない。吾吏須は重い溜息を零した。
「別に私の正体が何であれ、貴方には関係ないでしょう？　貴方はただ白兎啓太と理想の関係になればいいのです」
　たしかにそれでいいのかもしれないが、さすがにそれだけで済ませてしまうのは何か間違っている。何故だかは分からないが、きっと普通の人間ならばこれだけの説明では納得いかないだろう。
　しかし、これ以上話しても帽子屋はまた意味不明な返事をするだけだと思い。吾吏須はそれ以上質問をするのを止めた。
「そうだ、夢原吾吏須……一つ言っておきましょう。貴方はあまり他人に強気な態度や表情を出してはなりません。世の中には貴方のような強気で傲慢そうな子供を無理矢理自分の物にして泣かせてみたいと思う人間が大勢居るのですから」
「はぁ？」
　吾吏須がこんな声を出してしまうのは仕方ないだろう。いきなり強気な子を泣かせてみたいなど意味の分からないことを言われても、分からないうえに混乱するに決まっている。
「忠告です。強気な子ほどマゾヒスティックに教育したくなるのがサディスティックの性というものなのですから。では……失礼いたします」
　すると、帽子を採り、お辞儀をし顔を上げた瞬間――帽子屋は突然姿を消してしまった。
　いったい目の前で何が起こったのか、それを頭の中で解釈した時はすでに帽子屋の姿は無かった。けっきょくあの人間は何だったのか、むしろ目の前から消えてしまったのだから人間かどうか怪しい。

しかし一つだけ分かったことがあった、それはまだ啓太に想いを伝えることができるということ。

――啓太と理想の関係になれれば、まだ俺にも希望が残ってたんだ。

このことに関しては、たしかに帽子屋にお礼を言ってもいいかなと思いながら。意味不明な『夢の住人』やら最後に言った言葉のせいで、この感謝の気持ちが少し薄れている気がした。

とりあえず、今の自分はマゾヒスティックでもなければ、そんな風に調理される気もさらさら無かった。

「夢原吾吏須」

後ろから、吾吏須が一番嫌いな人間の声が聞こえた。つい5分ほど前にも聞いた低く冷たい声の主はきっと吾吏須のことを鋭い目で睨んでいる。

「せ、先生……」

「私は君に待てと言った、しかし君は私の言葉など聞かず不信人物の場所へと向った。さてこれで5回目だな夢原吾吏須……君には学習能力が無いらしい。あまりにも呆れてしまう君の行為、私の受け持つ生徒だと思うとこれほどまでに恥じなことは無い。処罰として放課後教室に残るように」

ネチネチとした松山の攻撃に吾吏須は一瞬この人物を殴って別の場所へと逃亡を図れないものかと考えた。しかし此処は素直に謝りさっさと終わらせるのが利口だと思い渋々松山に謝罪の言葉を述べようと口を開いた。

「すみませんでした、松山先生」

その言葉にできるだけ皮肉と憎しみを込めて言うと、少し吾吏須は晴々とした気分になる。そもそも顔がいいのだから、もう少し愛想がよく優しかったらさぞモテるだろうに。

しかし、そうしなくても女子生徒からは『鬼の松山』は人気だった。女子曰く、あの冷淡な瞳にクールな性格、そして大人で知性的

な表情、彼の担当するクラスに私も入りたい！　らしい。
だが吾吏須にはいったい何処が良いのかさっぱり分からない、ただ少し顔がいいだけの陰険根暗教師ではないか。
「それでは、すぐさま教室に戻りなさい。その前に、あの不信人物とは知り合いなのか？」
「俺のプライバシーに関わることを何故貴方に話さなければならないんですか？　教師だからですか、ですが俺には拒否権がありますよね。だったら俺は話しません」
一瞬、吾吏須は勝ったと思った、しかし松山は自惚れるなというかのように嘲笑った。
「私は君のプライバシーについて知りたいとは思わない。むしろ聞きたくも無い。ただ、あの人物を特定する為だ。教室を出た時は大石と言ったな」
本当、松山は人を怒らせるのに長けているなと吾吏須は実感する。このまま素直に帽子屋との会話を話しても頭がおかしいと思われるだけので吾吏須は最低限のことだけを話すことにした。
「いや、大石ではありません。人違いでした……本名は分かりませんが自分のことを『帽子屋』と名乗っていました」
「帽子屋……ずいぶんと個性的な名前だな。まぁ本名ではないだろうが、とりあえず君は教室に戻りなさい」
階段の方向を指差しながら松山は言った、それに素直に従い無言で階段を上り教室までの道のりをゆっくりと歩き始める。
あの帽子屋と名乗った人間は、もしかしたらこの夢は『悪夢』になるかもしれないと言ってきた。
つまり、啓太の居る幸せな夢から辛い現実に戻される。それはたしかに『悪夢』なのかもしれない。
幸せな夢の中にずっと居たい、だけど夢には必ず終わりが来る。辛い現実に引き戻されれば幸せを味わった人間はその辛さが倍増するだろう。だから幸せなことを思い出させる『幸せな夢』は時として『悪夢』となりうるのだろう。

「だから『幸福と悪夢の薬』か……」
たしかにそれ以外に現し方が無いかもしれないと、吾吏須は苦い笑みを零しながらながら思った。
教室の扉の前に着いた時、ちょうど一時間目の開始を告げるチャイムが学校中に響き渡った。扉を開けると教室に居た生徒全員が次の科目である国語の授業で必要な道具を出している最中だった。
松山は教室に入ってきた時、準備をしていない、もしくはしている最中の場合その生徒にネチネチと嫌味を言い始める。全員それを恐れてか松山の担当する国語は叱られないように万全の体制にしてある。
吾吏須もこれ以上嫌味を言われるのはさすがに嫌なので、引き出しの中に入っている教科書を出し始める。
「吾吏須、大丈夫だったか？」
そう、吾吏須のことを気にかけてくれたのは啓太だった。
「あーまぁ、いちおな」
どうやら、あの謎の人物のことはこのクラス全員が気になるらしく視線が全て吾吏須に集まった。たしかにあのファンタジーを絵に描いたような人間と話しをしていたのだから気になるだろう。
だが、さすがに此処で本当のことを言うのも頭がおかしいと思われるだろうから、松山に言った嘘と同じことを言うことにした。
「人違いだよ、従姉妹の親戚の兄嫁の……なんだっけ、とにかく俺の知っている大石とはまったく関係ない人だった」
「お前の知っている大石って人もあんな格好してるのか？」
此処はいったいなんて誤魔化そう、いい案は無いものかと思考を廻らせていると扉が開いた。
「教科書の３７ページを開きなさい」
入ってきてから一番初めに発した言葉がこの一言とは、この人はもう少し余裕のようなものを持った方がいいと、吾吏須は等の松山を睨みながら思った。
これから二時間目までこの陰険根暗オールバック教師の授業にな

るのかと考えるだけで吾吏須は少し欝になりそうだった。

第４の国　「三月ウサギの嫌味」

ようやく国語の授業も終わり、１５分程度の休み時間が訪れた。しかし生徒のほとんどは何故か教室からあまり出なかった。
普段ならば図書館へ本を返しに行くなど、教室に残る生徒は少ない。
「啓太、やけに教室に生徒の数多くないか？」
「それは、この次の三時間目から六時間目まで全部、今年の文化祭の係り決めとかの時間だからだろう」
そういえば、と吾吏須もすっかり９月の上旬に行われる学校行事『桜花祭』のことを忘れていた。
もちろんこれは担任である松山と学級委員長などが進めるので迂闊に授業に遅れるわけにはいかない。遅れようならば松山の容赦ない鉄斎が待っているのだから。
「ということは、今日は一日中、全て松山……先生の授業ってことかよ。うわー本当に欝になりそうだ」
さすがに教室、しかも松山が居るので仕方なく先生を付ける。本当ならば先生のせの字も言いたくないのだが態度が悪いと言われてしまう。
すでに放課後居残るように言われた吾吏須にとっては、これ以上松山の機嫌を損ねるわけにはいかない。
「吾吏須ちゃん！　その気持ちはよく分かるけど頑張なさい」
「だから『ちゃん』を付けるな！」
後ろから高い女性の声が聞こえ、吾吏須はその人物の名前の呼び方に意義を唱えた。
振り返ってみれば、そこにはやけに大人びたクラスメイト、神宮寺愛（じんぐうじあい）が威風堂々と立っていた。その性格から尊重や嫌味を込められて『女王様』と呼ばれている。
実際にけっこうな大金持ちだか資産家らしいが、その実態は担任

である松山しか知らなかった。あまり本人も家の話をするのを嫌がっていたからだ。
「あら？　女王に反逆する人間は首を狩るわよ」
少しでも反抗しようものならば、すぐさま出てくる言葉が『処刑』と『首を狩る』という言葉だった。たしかに愛はそういった面では恨まれていることが多い、あまりにも傲慢すぎると。
しかし判断力もあり、なおかつリーダーシップがある愛は、このクラスの学級委員長という立場だった。だが、この愛自体あまり規則を守っていない部分もありその辺は学級委員長としてどうなのかと問われれば、それは一言『女王様だから仕方ない』という答えしか返ってこなかった。
担任の松山も、自分の目で愛が規則違反をしている現場を見たことが無いので罰せられない。それに松山にとってもリーダーシップのある人間を学級委員長にしておきたいのが本音だろう。
「お前に男で女みたいな名前付けられる人間の身にもなってみろ！
だいたい『アリス』ってなんだよ、そんなおとぎ話じゃあるまいに。息子にこんな名前を付ける親の精神が分からない」
「いいじゃないの、可愛い名前よね。そうでしょ吾吏須ちゃん」
やけに『ちゃん』の部分を強調した言い方に吾吏須はものすごく嫌な顔をしていた。この女のような名前のせいで吾吏須はよくクラスメイトにからかわれていた。
この多少ふざけてるとしか思えない名前は母親がどうしても外国風の名前にしたかっただからだという。女の子が生まれてくると思っていたが生まれてきたのが男の子、しかし一番最初考えていた名前『アリス』を諦めなかった母親は男の子である息子に『吾吏須』と名づけたという。
「そうだよ、吾吏須ちゃん」
「は？　おい啓太、お前今ずぐに殺されたい？」
「なんか女王様の時と完璧に態度違うだろ」
「あたりまえだろ、女王様は仕方ないとしてお前に言われると腹立

つんだよな。よし首出せ、いますぐ女王様から鎌借りて首切り落としてやるよ」
遊びで―（一割ほど本気だが）よく啓太と冗談を言うことがある。それが吾吏須にとってはかなり幸せな時間に分類だれるだろう、あの陰険根暗教師の居る学校というだけで拒否反応が出るのだから、こういった雰囲気が吾吏須にとっては楽しかった。
ちなみに、何故か愛は巨大な鎌を持ってきている。これは違反ではないのかと思うが学校に私物の持込は必要なもの意外はダメなのだが、何故か愛の鎌は持ってきてもいいことになっていた。
これも何故かと問われれば『女王様だから仕方ない』としか言えなかった。
「吾吏須ちゃん、私もその計画にのった。思う存分切ってやりなさい」
「せめて女王様も止めてくださいって……ちょ！　吾吏須本気で狩ろうとしてるだろ！　それ以外と痛い……っていたッ！」
偽物の鎌で啓太の首を刈るふりをしている吾吏須を笑いながら愛は見ていた。しかし偽物のはずなのに何故かとても啓太は痛そうだった。
「まって吾吏須！　本気で痛いよこれ、絶対に磨いであるでしょこれ！　ちょ、これ新手のいじめですか？！」
「あっはっは、今後俺のこと『ちゃん』付けしなかったら許してやろうか考えてやらんでもないぞ愚民め！」
「そうだ、ねぇ吾吏須ちゃん。お願いがあるんだけどチョーク持ってきてくれない？」
吾吏須が啓太をいじめるのを一旦止めて、愛の方を見る。
「チョーク？　なんで俺が、女王様が持ってくればいいだろ」
「貴方、私を誰だと思っているの？」
「気高く傲慢な女王様」
あまりにも素直な答えに、愛は溜息をついた。
「私は学級委員長よ、この後は桜花祭のことについて話し合うから

当然私もやることがあるの。だからお願い」
「女王様が頼まれた仕事だろ？　だったら責任もってやれよ」
「はぁー仕方ないわね――松山先生、私は忙しいので変わりに夢原君に仕事を頼んでもいいでしょうか？」
　すると、机の上で資料を見ていた松山は愛達の方向を向き、何時もよりも少し愉快そうな目で答えた。
「そうだな、神宮寺は学級委員長の仕事があるのだから、そこの何もしておらず愚痴を零している生徒に頼むべきだった」
　もちろん、この『愚痴を零している生徒』というのは吾吏須のことだろう。松山は吾吏須のことを嘲笑うかのような表情で見ていた。
「陰険野朗が……ッ！」
「吾吏須、俺も一緒に行こうか？」
　すると、啓太が自分も行くという提案を出してきた。もちろん吾吏須は啓太と少しでも一緒にいられるのならばこの提案も悪くないなと思い、一緒に行こうという返事をする為に口を開いたが、松山の方が早かった。
「白兎、君は行く必要は無い」
　その松山の言葉に吾吏須は不満を感じた、誰と行こうが松山には一切関係ないことなのに。
「先生……俺が誰と行こうが関係ないんじゃないですか？」
「ほう、夢原吾吏須。どうやら君は友人と何時でも一緒でなければ心配で一人でチョークも持ってこられないほど心配性なのか？」
　その言葉に、カチンときてしまった吾吏須は反論しようとした。しかし
「お前、いいか――」
「そうなんですよ先生、吾吏須ってば俺が居なきゃ駄目な子で。というわけで一緒に行ってもいいですか？」
　啓太がその反論を邪魔した、というのは少し酷い言い方かもしれない。だが、何故か啓太の言い方はまるで遊びのようなふざけた言い方なのに少し力がこもっている気がした。

そう感じた理由は分からなかったが、少し怒りが混じったような、そんな言い方だった。
「そうか……だが白兎、君には桜花祭の今までのパンフレットを持ってきてもらいたい。そうだな、だいたい１０年分ほどでいいだろう」
「は、はぁ」
「というわけだ夢原、残念だったな大好きな友人と一緒になれなくて」
まるでその松山の言葉は。わざと吾吏須と啓太を離そうとしているかのようだった。そこまで俺のことが嫌いで困らせたいのかこの陰険根暗オールバック教師は！　と吾吏須は声に出して叫びたかったが後ろで啓太が肩を叩きまぁまぁとなだめている。
しかし、このあからさまに喧嘩を売っている松山に吾吏須の怒りが収まるわけも無く、ギロッと今までの恨みもこめて、目の前で愉快だと言わんばかりの表情をしている松山を睨んだ。
その睨みを松山はまるで楽しむかのように鼻で笑う。吾吏須は拳を握り締め近くにいた啓太にしか聞えないくらい小さな声で呟いた。
「この……陰険根暗オールバック三十路一歩前教師が」
「夢原、そんなところでノロノロとしていていいのか？　次の授業まであと１０分しか無いぞ」
「ちッ！」
吾吏須は舌打ちをし、乱暴に扉を開け倉庫へと向かった。
何故あの教師は吾吏須と啓太を引き裂くような行動に出るのだろう。そもそも、今まで文化祭のことでパンフレットを使ったことなど一度も無かった。ならば持ってくる必要は無いはずなのに、何故持ってこさせるのだろう。
嫌がらせなのだろうか、ならばなんて大人気ない行動なのだろう。否、その前に教師としてどうかと思う。
松山への不満が頂点へと差し掛かったり、この次の授業に出るのが本当に嫌になってきた吾吏須は、大きな溜息を零す。しかし、今

は松山のことなど気にしないで、どうやって啓太と恋人同士になるかが一番重要だった。
告白の仕方ならばいくいらでもある、ベタな少女漫画のような体育館裏や、誰も居ない教室。やろうと思えば啓太の部屋で告白することだって幼馴染の吾吏須にとっては容易いことだった。
しかし、此処はアメリカでも無ければ日本だ、まだ同性愛など一般的でもなければ多少軽蔑されている部分もある。その時吾吏須は何故この国はこうも自由じゃないんだと恨んだ。
もしも、もう少し同性愛が一般的ならばまだ迷わなかったかもしれない。告白したならしたで『あぁ、そういう趣味の方なんですね』となったかもしれない。
だけど此処は日本だ、もしも告白などしたら啓太はどう思うだろうか。『気持ち悪い』それとも『近付かないでほしい』とでも思うのだろうか。
「どうすればいいんだよ……ッ！」
よく、どうして人間は恋をして告白するのにあんなにウジウジと悩み続けるのだろうと思っていた。悩んでも永遠にループするだけだ、恋愛というのはそういったものなのに。
しかし、今ようやく気が付いた。恐いのだ、告白して好きな人間に振られてしまうのが。好きな人に否定されるのが恐い。
「啓太から否定されるのか……？」
それは吾吏須にとっては恐ろしかった、今までずっと近くに居たの人が、一番自分を分かってくれていた人から否定される。
しかし、このままウジウジして告白をしないでいれば、それこそ松山の言った『臆病者』なのではないだろうか。『好き』という3秒もかからない言葉を言うだけでこれだけ悩むなど。
「はぁ……」
本日、何度目になるか分からない大きな溜息を零した、時計を見ればあと5分で授業開始の時間だった。
仕方なく急ぎ足で倉庫へ向う、心の中のモヤモヤは少しだけ無視

して。

第五の国　「精神的外傷」

倉庫からチョークを持ってきた時、すでに授業開始までギリギリの時間だった。教室に入れば。

「たかがチョークを持ってくるだけで１０分もかかるとは、何処で寄り道をしていたんだ？」

と、また嫌味を言われてしまった。その言葉を無視しながら少し乱暴にチョークを押し付け、すぐに席に座った。隣では啓太がお疲れ様と声をかけてくれた。

すると、チャイムが鳴り響いた。すぐに教室のざわめきが消え全員が席につく。

「それでは、これから桜花祭についての相談を始める。神宮寺、司会を頼む」

「はい、先生」

松山がそう言うと、愛が黒板の前へとやってくる。そこに立つと普段は傲慢な愛も何故か凛々しくなるから不思議だ。

「それでは、前回みなさんに桜花祭の出し物で何をやりたいかアンケートを取りました。その結果、今回我クラスで行うのは喫茶店ということになります。それでは、今日はいったいどんな喫茶店にするかを話し合いたいと思います。誰か意見のある人は挙手するように」

しかし、誰も手をあげようとはしなかった。少しの間、微妙な空気が流れる、しばらくして啓太が弱弱しく手を上げる。

「はい、けい……白兎君」

普段の癖でつい啓太と呼んでしまいそうになったが、すぐに名前を呼びなおした。啓太は立ち上がり少し弱気な声で喋り始める。

「あの……有名な童話の『不思議の国のアリス』をテーマにしてみたらどうでしょうか？　店員がキャラになりきって接客するのとか」

「アリスか、たしかにそれなら去年、演劇部が『不思議の国のアリ

ス』を演じたから衣装があるわよね。まだその衣装残ってるかしら猫柳君？」
　すると、きっと演劇部の部員だろう人物、猫柳が立ち上がった。
「はい、衣装は全部のこしてありますし。あの劇はけっこう擬人化的なものが多かったので動きやすいと思います。ですけど……」
　猫柳は少し戸惑い、愛から少し目を逸らした。
「何？　言ってちょうだい」
「あの劇での主人公は『少年アリス』だったんですけど。大丈夫でしょうか？」
「あら、それならまったく問題ないわ。むしろ好都合よ、もう誰がアリス役をやるかは決まったも同然なんだから」
　その言葉に、一瞬吾吏須はまさかと思った。この場合、もしかしたら自分がアリス役をやるのではないのかと思い、吾吏須も手を上げる。
「はい、夢原君」
「その、神宮寺さんが言っているアリス役というのは……もしかして」
「もしかしなくても貴方、夢原君よ！」
　ビシッと人差し指を吾吏須に突きつけ、黒く長い髪が中に舞う。その迫力のせいで一瞬怯んでしまったが、此処でこの役柄を否定する理由も無いので黙っていた。
　やっぱり、と吾吏須は心の中で呟く、愛ならば同じ名前だということで簡単に自分に役柄を回すだろうと、だいたい吾吏須は予想はできていた。
　その時、ひっそりと愛が『私は女装でもよかったんだけど』と呟いたのは聞かなかったことにした。さすがに女装だけはたとえ名前は少女のようであろうと男のプライドが許さない。
「それじゃあ、今回のクラスの出し物が『アリス喫茶』で良い人は挙手してください」
　愛の声と同時に、ほとんどの人の手が上がった。どうやら今年は

『アリス喫茶』に決定らしい。
その後の話し合いで、啓太が白ウサギとなった、理由はやはり名前らしい。そして愛は女王様、これはもうクラス全員一致、誰一人として不賛成の人間は居なかった。
此処で一番の笑いを集めたのが鬼教師である松山の役柄だった。
「ウサギだって！　あの松山がウサギ！　しかも本当にウサ耳付けるんだろ！」
放課後、吾吏須は松山の役柄に先ほどから大爆笑していた。理由は、やはり会計の部分は教師である松山がやることになったのだが、もちろんそれなばら何か仮装しなければならない。それで与えられたのが『三月ウサギ』
しかもウサ耳付きということで、普段から松山に恨みのある生徒（特に吾吏須）は大爆笑だった。あの鬼教師が可愛らしいウサ耳を付けるということで、想像するだけでも笑えてしまう。
当の本人である松山は仕方ないといった感じで、渋々その役柄を許可した。
「吾吏須、笑いすぎ」
腹を抱えながら笑う吾吏須を啓太は注意するが、その啓太までもが爆笑していては説得力が無かった。
「って、啓太だって笑ってるだろ！　ざまーみろだよ、松山の奴。普段俺に嫌味を言ってきた罰だな」
「まぁ、ウサ耳は同情するけど」
白ウサギである啓太も例外は無く、松山のようにウサ耳を付けることになった。猫柳が借りてきた不思議の国のアリスの衣装はかなり本格的なものばかりで、ネットオークションやらに出せばかなりの値段になるだろう。
なんでも演劇部の部活方針は『演技だけではなく、衣装も完璧に』というものらしく、衣装の方にもかなりの部費をかけているらしい。
「松山、たしか今年で３０だろ？　いい年した大人がウサ耳か、本当に最高だな！」

普段の恨みも込めておもいっきり笑ってやると、とても気分が晴々する気がした。すると啓太が時計を見るとすでに5時を回っていた、もうすぐ部活に入っていない生徒は帰らなければならない時間だ。
「そうだ、吾吏須たしか先生に残れって言われてるんだろ？」
「あーそうだ、メンドクサイ」
今朝のことを思い出したが、あれはほとんど帽子屋のせいで、それで処罰を受けるのは多少理不尽のような気がしていた。しかし、松山の注意を聞かず走っていってしまった吾吏須にも否があった。
だが、一日中ずっと松山の授業で、しかも放課後まで一緒だなんて、今日は本当についていない日だなと思う。
「どうする、俺は陸上部で文化祭の準備に専念する為に部活は休みなんだけど。待ってた方がいいかな？」
他の演劇部や美術部などは各部の出し物がある為部活があるが、得に陸上部は出し物が無い為この時期は部活が休みだった。
ちなみに吾吏須は帰宅部だ、理由は『部活なんかに入るなら家で思春期の少年の心理学を読んでいた方が時間を有効的に使っている』だろうだ。
「あぁ、先に――」
帰ってもいい、と言おうとしたが止まってしまった。あの時と同じだと感じたからだ、あの啓太が交通事故にあった時の日のこと――
その日も今日と同じとても晴れた日で、そして同じ言葉で別れた。
『先に帰ってもいいぜ』
その5分後に救急車のサイレンが聞えた、それもこの学園の近くで。窓から外を見れば人だかりができており。忘れ物を鞄に入れてその場に行ってみれば。
正面が経こんだトラックと、血塗れの啓太が横たわっていたのだから。
「やっぱり、一緒に居てくれないか？」
「へ、あーうん。いいけど」

「悪いな、ほら松山と二人きっりなんて死んでもゴメンだしさ！」
このまま分かれてしまえば、そしたら現実と同じようにまた会えなくなってしまいそうな気がしたからだ。そうしたら今度こそ希望を失い、また同じ痛みを味わうことになってしまう。
あんな痛み、一回だけで充分なのだから。
すると、教室の扉が開いた。そこから黒い学級記録帳を持った松山が現れた。吾吏須を見下すように眺めた後、隣に居る啓太に視線を向ける。
「何故、白兎が此処に居る？」
その声はまさに啓太が邪魔だと言葉にはしていないが雰囲気が語っていた。ギロリと氷点下零度の瞳で啓太を睨むと一瞬啓太はその恐ろしさに怯んだが、すぐに松山を睨み返す。
「啓太が居たら、何か都合の悪いことでもあるんですか？」
「いいや、ただ夢原吾吏須はお友達が居なければ放課後の処罰が恐い臆病者なのかと思ってな」
「すみませんけど、先生……これ以上、吾吏須のことを臆病者と言わないでくれますか？」
めずらしいと思った。普段あまり松山に反論しない啓太が今回ははっきりとした口調で反論した。どうやら松山も驚いているらしく意外そうな顔をしている。
その声には力と、微かな憎しみがこもっているような気がする。普段の啓太からはありえない行動に吾吏須は目を見開いた。
「たしかに、俺が居なきゃいろいろ駄目な部分とかありますけど！」
「おい」
「それでも、俺の大切な友達です。俺が引っ越してきて、あまり回りに馴染めなかった俺に初めて声をかけてくれた。だから吾吏須を臆病者なんて呼ばないでください」
意思のはっきりとした声、そして吾吏須のことを『臆病者』と言った松山に対しての反抗的な視線。
――啓太が、俺の為に怒ってくれた？

そう考えただけで、吾吏須は今までの松山の嫌味が全て吹き飛ぶような気がした。一番大切な、大好きな人が自分の為だけに怒ってくれた、今の吾吏須にとってこれ以上の幸せなんて無い。
すると、松山は軽くパンパンと拍手をしながら啓太を睨みつけた。
「それはそれは、素敵な友情を見せてくれてありがとう白兎啓太。しかし、処罰の邪魔だ、今すぐこの場から立ち去りなさい」
松山の言葉は、まるで怒りを込めたような冷たい声だった。今までに聞いたことの無いような低く冷たい、松山をここまで怒らせる原因がその時の吾吏須には分からなかった。
どうやら啓太も松山の声の低さが異常だと分かっているのか、その場に呆然と立ち尽くしていた。
「聞えなかったか？　処罰の邪魔だ、出ていきなさい」
これ以上、松山を怒らせてはいけないと直観で感じ取った吾吏須は、すぐさま啓太の方向を向く。
「け、啓太！　そんじゃあ教室の前で待っててくれないか？」
「あ……あぁ、分かった。そんじゃあ教室の前で待っているから」
すぐに鞄を持ち扉の方向へと小走りする啓太、ピシャンッと扉が閉まった時。
「ちッ……」
舌打ちが聞えた、どうやらそれは舌打ちとは縁が遠そうな松山のものだった。さっきからあまりにも不自然な行動ばかりとっている松山を吾吏須は驚いたといわんばかりの目で見ていた。
すると、すぐに教師専用の机に座り、無言で吾吏須を舐めるような視線で眺める。気持ち悪いと吾吏須は思った、何故こうもネットリとした視線で見るのだろう。
そして、微かにニヤリと不気味な笑みを浮かべた。その笑みは本当に恐いと思ってしまうほど不気味で、普段あまり松山が見せるような表情ではない。
たまに吾吏須を嘲笑うような顔をするが、それよりももっと不気味で何かを企んでいるかのような。それが恐くて吾吏須は後ろに後

退る。
「座りなさい」
それは提案というよりは、むしろ命令のような気がした。この命令に逆らえばいったいどんなことになるのか、それはとても恐ろしいことのような気がして素直にその命令に従う。
「夢原吾吏須、君はいったい何回注意をすれば反省してくれるのかな？　今回、居残りを命じられた切欠は？」
何も言わないということは、どうやら吾吏須本人に答えさせるつもりなのだろう。本当にこの人間はどれほどまでに嫌味な奴なのだ。
「俺が、先生が来ても喋っていたのと。注意も聞かないで出ていってしまったせいです」
できるだけ感情を抑えて、冷静さを保ちながら喋る。しかし手はズボンのを強く握っていた、どうしても松山のことが気に入らないからである。
松山が自分の担任という立場でなければ今すぐこの場から立ち去ってやるのに。
「よろしい、ちゃんと自覚はしているようだな。それでは教科書４１ページの古文を自分なりに訳したものをノート５ページ分書いて明日までに提出しなさい」
「明日？！」
「そうだ、成績優秀な夢原ならばこれくらい簡単だろう？」
たしかに、成績ならば学級委員長の愛と一位と二位を争うくらいだ。全国模試でもかなりの上位にランクインしている。
しかし、それと課題を早くできるかというのはまったくの別問題である。だがここで反論しようものならば、さらにもう１ページ追加されるかもしれない。
実際、吾吏須も反論して、教師に向って生意気だという理由で課題を２ページほど追加されたことがある。
そして何より、本日の国語の課題で既に２ページ分の課題を出されている為、合計７ページ分をやらなければならない。今日の夜は

徹夜と決まったも同然だった。
「（この……ッ！　陰険根暗オールバック三十路一歩前鬼教師がぁ！）」
心の中だけでそう叫ぶ、日に日に松山への恨みの言葉が増えていっているにも関わらず（単に知らないという理由もあるが）松山は何事もなかったように、『ざまあみろ』といった視線で吾吏須を見ていた。
「それでは、せいぜい頑張りなさい。夢原吾吏須」
「はい、先生」
この名前をフルネームで呼ぶのも何故かムカツク、むしろこの松山が何かを言うこと自体がムカツクかもしれない。
喋り方や、まるで見下すような言い方。もう松山の存在自体が吾吏須の苛つく、かなり酷い言い方かもしれないが今の吾吏須にはこれ以上最適な言葉が見つからなかった。
普通に注意するだけならば、まだそれは自分が悪いのだなと理解できる。しかし、松山の言葉には嫌味も混じっている為、いくら正しいことを言っていても理不尽な気がしてならない。
「では、早く帰りなさい。……少し惜しいが」
最後に呟いた、今にも消えてしまいそうな声を吾吏須はたしかに聞いた。いったい何が惜しいとでも言うのだろう、まさかまだ苛めたりないのか。
「それじゃあ、失礼いたします」
この場に居ては危険だと思い、すぐさま鞄を持って教室の扉を開ける。すると廊下で待っていた啓太が近付いてきた。
「ゴメンよ啓太、待たせたな」
「べつに大丈夫だよ、それよりどうだった？」
「あーなんかノート５ページ分らしい、ったく……今日散々課題出したくせに」
「合計で７ページって、多いな……大丈夫か？」
「まぁ、徹夜は覚悟してるけどな」

こうやって心配をしてくれる啓太の存在が吾吏須の中では大きいのは言うまでも無い。今まではその感謝を忘れていたが、啓太を無くして松山に嫌味を言われた時、隣には慰めてくれる人間が居ないこと、そしてそれがとても辛いということを思い知らされた。

こうやって『あたりまえ』の中にある幸せというのがどれほどまで大きいのか、どれほどまで自分を支えてくれていたのか、それはきっと失って初めて分かることなのだろう。

「あのさ、ありがとうな。そうやって俺のこと心配してくれて」

吾吏須がそう言うと、啓太は以外だといった表情をした。たしかに普段あまりこういったお礼の言葉を言うことは無い、だがこうやって『あたりまえ』の中にある幸せに気付いた時、人はとても素直になれるのではないのだろうか。

今回、吾吏須が素直にお礼を言ったのはその幸せに気付いたからだ。『ありがとう』というたった5文字の言葉の中には今までの感謝が詰まっていた。

「へ？　ど、どうしたんだよ……普段あんまりそんなこと言わないのに」

「別になんだっていいだろ。ただ、この『あたりまえ』ってすごく幸せなんだなーって思っただけ」

「それって、もしかしてお前の見た夢のおかげか？」

夢、というのはもしかしたら吾吏須にとっての現実のことなのだろうか。どうやら啓太は今朝、吾吏須が言ったことを夢だと思っているらしい。

たしかに、自分は交通事故にあっていないのに『交通事故にあった』と言われれば夢だと思うだろう。

「どんな、どんな夢だったんだ？」

「え、それは……俺は忘れ物をして、そんで通学路で待ってるはずのお前にトラックが突っ込んだって、それで病院で……病院で」

そこから先を言うのが恐かった、あの恐怖を思い出してしまうから。まだ温かい体温、けれど啓太の意識は今此処には無い。一番大

切なものを失ってしまった逸脱間、それはあまりにも大きすぎて辛かった。
「恐かった、お前にもう会えないって聞かされた時……本当に恐かった」
いつの間にか声は震え、目には雫が溜まっている。泣いてしまった吾吏須を心配して啓太は安心させる為に肩に手を乗せた。
そこから微かに伝わる体温が、啓太は今此処に居るということを教えてくれた。それは確かなもので、一番吾吏須を安心させてくれるものだった。
「そうか、ゴメンな……」
「いや、大丈夫」
――そうだ、今はすぐ隣に啓太が居るんだ。
その幸福がずっと続けばいい、そう願わずにはいられない。
以外だった、こんなにも白兎啓太という幼馴染に支えられていたことが、案外吾吏須は脆い人間なのかもしれない。
普段、強気でいられるのも全て、啓太という精神の支えがあったから。だから普段の夢原吾吏須が存在していた。
「でも良かったじゃないか、夢で」
違う、本当はこちらの世界が『夢』なのだ。制限時間が一週間という儚すぎる夢、目覚めれば確実に悪夢となってしまう、とても居心地のいい『幸せ』な夢。
だがそれを知っているのは吾吏須一人だけ、否、帽子屋を含めなければの話だが。
「そうだな、本当……夢だったよかったのに」
その声はとても小さくて、すぐ隣に居る啓太にすら聞えないほど、すぐに消えてしまうほど小さな呟きのような。
もしも、吾吏須の居た『啓太が交通事故にあった』世界が夢で、こちらの『啓太が生存している』世界が現実ならばどれほどまで幸せなことなのだろう。
だが、帽子屋の言葉がそれを真っ向から否定していた。啓太と理

想の関係にならなければこの世界から、夢から目覚めてしまう。
けれども、まだ希望が残っている。今はそれに賭けるしかないのだから。
空は、また漆黒に包まれようとしていた。

第六の国　「苦痛の優しさ」

次の日、深夜1時まで起きて全ての課題を終わらせた吾吏須に松山が言った言葉は。
「全国模試でかなりの成績だった君が、この程度だったとは残念だな」
松山に嫌味を言われないようにと必死にやったのも虚しく、こんな言葉を言われてしまえば、それはそれはガッカリする。そして同時に殺意が芽生えてしまう。
念の為、愛に見てもらったらそれなりに良いと言われたのだが。それに客観的に見てもかなりの出来だったはずだ。
「あんの、陰険根暗オールバック以下略があぁ！」
とうとう全てを言うのがメンドクサクなってきてしまった為、以下略で済ますことにした吾吏須は現在啓太と一緒に処罰を受けていた。
その理由は、本日から桜花祭までの間は4時間目から6時間目まで全て準備の時間となる。それに運悪く遅れてしまった為、当然松山は二人に罰を与えた。
内容は、桜花祭に関する資料を持ってこいというものだった。しかし、この資料というのがかなりの量でダンボール3箱分はある。
ちなみに遅れた原因は、吾吏須が昼食の後そのまま寝てしまい、啓太はそれに付き添っていただけだ。
「まぁ、吾吏須！　あの課題はよく出来てたと思うし、それに今回のは仕方ないさ」
「分かってるけどさ、松山の野朗……何時か絶対に殺すッ！」
寝坊して授業に遅れてしまったのは仕方ない、だがどうしても課題のことは納得できない。
「受理してもらえたんだし、あんまり苛々するなよ」
「うーまぁ、な」

たしかに受理されたのは奇跡的かもしれない、普段ならば何故か吾吏須だけやり直しと言われるのだから。
ようやく倉庫から目的の資料を見つけ出した二人は、そのダンボールを持つ、しかし
「重ッ！」
まったく筋力が無いに等しい吾吏須にとっては、いくら紙といっても重い。隣に視線を移せば、そこには軽々しくダンボール二箱を軽々しく持ち上げる啓太の姿があった。
いくら陸上部だからといえ、これはいくらなんでも差がありすぎなのではないだろうか。それか単に吾吏須に筋肉が無いせいか、きっと両方だろう。
たしかに、吾吏須は１７歳の一般的な体系よりも痩せていて、しかも体育の成績は毎年２という恐ろしく低い。それに比べて啓太は他の科目はたいして上ではないが、体育だけは５だ。
「吾吏須、重かったら俺が持つけど」
「大丈夫だって、それにお前も三箱なんて無理だろ？　それにこれで持っていかなかったら松山が『おやおや夢原、どうやら君は友人に荷物を持たせ自分は楽をするような卑怯者なのだな』って嫌味言うに決まってる」
松山の声を真似しながら言った吾吏須に、啓太は少し笑った。
しかし、今回この処罰を受けるのは吾吏須だけで充分なはずなのに、一緒に居たという理由で啓太までも巻き込まれてしまった。そう考えると、なんだかとても申しわけない気がしてきた。
本来ならば啓太はこんな重たい荷物を持たなくてもいいのに、教室で楽な作業ができる立場なはずなのにだ。
「そのさ……俺と一緒に居て大変じゃないのか？」
「へ、どうしたの？」
「今回のだって、俺と一緒に居たせいで処罰受けることになってさ。それにこういうのって一回だけじゃないだろ、なんか申し訳なくて」
自分のせいで啓太が迷惑をしている、要らない苦労をしている。

しかし、そんな暗い思考の吾吏須とは裏腹に啓太は笑った。
「あっはっは！　どうしたんだよ吾吏須、お前らしくないな」
「何で笑うんだよ！　そりゃたしかに俺らしくはないとは思うけどさ」
「たしかにそうだけど、俺は大変だとか迷惑だとか思ったことは一度も無い」
「だって、迷惑だとか思わないのか？」
「親友って、そういうものだろ？　相手に迷惑かけたり、助け合ったり、想いを分かち合ったり。だから何も気にすることないって。それに俺は吾吏須と一緒ならこういう処罰も楽しい」
その時の啓太は、とても活き活きしていた。その笑顔を見れば全ての悩みが吹っ飛んでしまいそうなほど、すごく人に元気を与えるような。
そして何より、嬉しかった。啓太がそう想ってくれていたことが、てっきり迷惑だとか大変だという返事だと思った吾吏須にとって、本当にこの答えは希望に満ちたものだった。
「それとも、吾吏須は俺が処罰を受ける時に迷惑だって思ったりしたのか？」
「そんなわけないだろ！」
これだけは堂々と言えることだった、啓太が処罰を受けて、たとえそれに巻き込まれても吾吏須は迷惑だとは思わないだろう。きっと啓太と同じく『それも楽しい』と思えた。
「よかった、此処で迷惑だって言われたらショックで立ち直れない」
しかし啓太の想いは嬉しくもあり、同時に少し悲しくもあった。何故なら吾吏須が啓太に求めるのは『恋愛感情』
だが、啓太が吾吏須に求めるのは『友情』なのだから。
もしも此処で吾吏須が啓太に告白すれば、それはきっと裏切り行為なのだろう。本来ならば吾吏須が啓太に求めるのは『友情』でなければならない。

――俺、啓太を裏切るのか？

伝えたい、何万回でも何億回でも啓太に『好き』だと言いたい。しかし、それは啓太の想いを裏切り、この関係を終わらせてしまうことになるから。

「吾吏須？」

優しく問いかける啓太、その優しさもきっと『友情』からきているのだろう。初めてかもしれない、優しさが此処まで辛いと感じたのは。

啓太が意識不明になってからその大切さに気付き、以前より一層啓太を欲しいと願ってしまう。だからここまで優しさが辛く感じてしまうのだろう。

「何でもない……」

意思を持たないで呟いた言葉は、まるで泡沫のように消えてしまった。考え事のせいで、あまり元気の無い吾吏須を啓太は心配して声をかける。

「吾吏須……どうしたんだよ、最近元気ないし、何時もの吾吏須らしくない」

「ち、違うって！　ほら寝不足だよ、昨日徹夜したから疲れ溜まってんのかも」

「無理するなよ、辛くなったら俺に言ってくれよ！」

――その辛くなる原因が、お前の優しさなんだけどな。

「あぁ、そうだな。ありがとう啓太」

そう言った時、丁度４時間目の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

第七の国　「アリスと白ウサギの夕食」

学校の授業も終わり、松山の嫌味を耐え抜いた吾吏須に待っていたのは嬉しい知らせだった。

吾吏須と啓太の家はお隣同士だった、その為家族同士の交流が非常に多く、吾吏須の両親が両方出張などで居なくなった時はよくお邪魔していた。

しかし、高校にあがってから今までに無い長期の出張で啓太の両親はこのまま我が家の子供になっちゃいなさいと言ってきてくれたが吾吏須は拒否していた。

理由は、その頃から啓太のことを気になっていたからだ。同じ屋根の下で暮らすとなると、さすがに吾吏須も思春期なので欲望を抑えられなくなりそうだからである。

またに啓太を想像して自慰したことがあった、しかし何故か頭に浮かぶのは自分が啓太に犯されているシーンだった。

「なんで俺が受身なんだかな……」

そう呟きながら、啓太の家のチャイムを鳴らした。今回は啓太の両親が結婚記念日で啓太が気を使って二人で食事に出かけたらどうだと提案し、現在家には啓太しか居ない。

一人で食事を取るのも寂しいので、一緒に食べないかということらしい。それは吾吏須にとっては嬉しいことだった。

なにしろ、年に一回あるか無いかの啓太と二人っきりの食事なのだから。たしかに学校でも一緒に食べるが、家で二人きりというのはドキドキするものだ。

「はいはーい、吾吏須か？」

「おうよ、寒いから早く開けやがれ」

「あはは、ゴメン。どうぞ吾吏須」

扉から出てきたのはエプロン姿の啓太だった。やっぱりそういう家庭的なのも似合うなと吾吏須は少し見とれていた。

怪しまれるといけないと思い、すぐに中に入る。
「あ、そーだ。はいよ啓太」
紙袋からパックに入ったポテトサラダを取り出す。すると啓太は輝いた目でパットを掴む。
「すげー！　吾吏須のポテトサラダだ！」
たまに朝早く起きて弁当に手作りのポテトサラダを作って持っていく時がある。それを食べた啓太が言ってくれた言葉が『美味しい』
普段、料理をしても自分以外に食べる人が居ないというのは少し寂しいものがあった。それを誰かに食べてもらい美味しいと言ってもらえるのはとても嬉しかった。
他にもいろいろ啓太に食べてもらったが、一番美味しいといってくれたのがポテトサラダだった。それ以来、頑張って作る為に朝早起きして、夢中になりすぎて遅刻してしまうということもあったが。
それだけ、啓太に美味しいと言ってもらえたことが嬉しかった。他の人では意味が無い、啓太が美味しいと言わなければ作る意味が無いのだから。
「お前の好物だろ？　俺が腕によりをかけて作ったんだから感謝しやがれ」
「ありがたく頂戴いたします吾吏須さまッ！　そんじゃあ一緒に食べよう」
その笑顔を見て吾吏須は何故か安心した。きっとこの無邪気な笑顔も吾吏須を支えてくれていた内の一つなのだろう。その幸せそうな笑顔を見ると作って本当によかったと思う。
「失礼しまーす、と」
家の中はとても綺麗だった、啓太の母親がとても綺麗好きなので掃除には一切手抜きをしないらしい。吾吏須は啓太が『これで料理も手抜きしなければなぁ』と呟いていたことを知っている。
リビングに向うと、そこにはスープ用のお皿に吾吏須の好物のシチューが盛られていた。
「お、シチューじゃん！　お前、俺の好み分かってるなぁ」

「そりゃ、１２年間も一緒に居るからな。嫌でも覚えるよ。そうそう今回はなんとホワイトルーから作ったんだぜ！」
「本格的だな、いままですっと市販のルーで作ってたのに」
「けっこう楽しかったぜ、それより冷めないうちにな」
吾吏須が椅子に座ると、啓太が小皿にポテトサラダを盛った。そして両手を合わせて。
『いただきます』
何故かこういうところに啓太は煩かった。今時こうやる高校生も珍しいのではないのだろうか、吾吏須も一人で食べる時はしないが、こうやって啓太と一緒に居る時はちゃんと言っている。
啓太の作ったシチューを口に含むと、それはとても吾吏須の好みに作られていた。少し牛乳が多い薄味。
「美味しい」
「本当ッ！　良かった、吾吏須にそう言ってもらえると嬉しい」
「俺の方はどうだ？」
「すげー美味しいよ！　本当、吾吏須は将来良いお婿になれるよ、俺が保障する」
「なんだよ、その口説き文句」
些細な会話、学校で話すよりもすごく近くに居るということを実感できる時間は最高だった。何故なら学校では吾吏須以外誰も知らない啓太を体感できるのだから、自分だけが知っている啓太、それだけで吾吏須の独占欲は満たされていた。
「そうだ、今回はお前にプレゼントがあんだよ」
そう言うと、吾吏須は立ち上がり紙袋の中からゲームソフトを取り出した。
「そ、それは！」
啓太が机から身体を乗り出して、吾吏須の手に握られているゲームソフトを見た。それは二人が気にいっているシリーズの新作だった。前々から啓太がやってみたいと言っていたのを吾吏須は覚えていた。

「最近発売されたばっかりの新作ゲーム！　俺はもうクリアしたから貸すよ」
　すると、啓太がものすごい勢いで吾吏須の方向へと走っていった。そして
「本当！　吾吏須ありがとー俺の神様ッ！」
　一瞬何が起こったのか、まったく理解できなかった。理解した時には既に啓太は吾吏須におもいいきり抱きついていた。自分に啓太が抱きついている、そう考えるだけで吾吏須の鼓動は高鳴る。
　あまりにも大きい鼓動に、このまま心臓が破裂してしまうのではないのかと心配になってしまう。
　啓太の温度が伝わってくる、その心地よさについ抱きしめ返したくなってしまう。ずっとこの温もりを感じていたいと願ってしまうのは罪なのだろうか。
　しかし、このまま抱き疲れればこの鼓動に気付かれてしまう、そうしたら啓太はどう思うのだろう、不思議に思うに決まっている。こんな男に抱きつかれて鼓動が高くなるなんて普通はありえないのだから。
　どうしても、この鼓動を知られたくない。もしも知られてしまったら、裏切りになってしまいそうだったから。
「離せッ――！」
　おもいいきり啓太を吹き飛ばしてしまった、いったい自分の何処にこんな腕力があったのだろうと思ってしまうくらい大きな力で。
　その吾吏須の反応に啓太は目を見開いていた。
「あはは、ゴメン……つい嬉しくて」
「いや、そういう意味じゃ！」
「嫌に決まってるよな、男に抱きつかれるなんて。気持ち悪いよな……」
　言い方があまりにも自虐的に聞えた、啓太のそんな声は聞きたくなかった。しかし此処でどうやって否定する、どう否定しても蟻地獄だ、もがけばもがくほど埋まっていく。

ならば、いっそ一般的な反応をした方がいいのかもしれない。
「あ、あたりまえだろ！　お前みたいなゴツゴツした男に抱きつかれるよりはボインな女に抱きつかれる方が、嬉しい……んだよ」
違うと叫びたい、本当は抱きつかれた時はすごく嬉しかった。そのまま抱きしめ返したかった。しかし常識と友情という名の壁が吾吏須に嘘を言わせた。
「そうだよな、本当にゴメン。それより早く食べよう、な！」
「あ、あぁ……」
しかし、そこからいっさい会話は無かった。両方ともさっきのことを気にしているのか、まったく話し出そうとはしなかった。
啓太の顔を見てみると、先ほどの笑顔は無かった。これは吾吏須が悪いというわけでは無いのだが、なんだかとても罪悪感を感じていた。
この空気は、一人で食事を取る時よりも辛く寂しいものだった。目の前に大好きな親友が居るのに会話が弾まない、本来ならばすごく嬉しい時間になるはずだったのに。
――なんで微妙な空気になるんだよ、俺のせいなのか？
結局、その後は二人とも会話をしないで吾吏須は家に帰った。久しぶりの二人っきりの食事だったのに、何故かとても疲れてしまった。
そのまま、松山から出された課題も片付けないでベットに横になる。明日は普通に話せるようにと願いながら。

第8の国　「友情、愛情」

次の日には啓太も何時もの笑顔で話してくれが、しかしやはり気にしているらしく昨日の夜のことは話題に持ち出さなかった。
吾吏須もその話題にはあまり触れられてほしくなかったのでありがたかったのだが。
しかし、何故かその日から少し距離を置かれている気がしてならい。こんなことなら、おどけた返事をした方が良かったと吾吏須は後悔していた。
そして、とうとう桜花祭まであと1日と迫った日、吾吏須と啓太は愛に買い物を頼まれ電車でデパートまで行くことになった。
「まったく、女王様が頼まれたことなのになんで俺達が」
駅で電車を待っている吾吏須が愚痴を零す、それを横で啓太が少し苦笑しながら受け止めた。
「仕方ないよ、だって女王様の方が忙しいから」
「そうだけど……それにしても、電車使わないと店が無いってのも不便だよな」
「たしかに、しかも土日だから満員電車は覚悟しないとな」
すると、駅のアラームが鳴り電車がホームに入ってくる。やはり祝日とあって電車はこれ以上人が入るのかというくらい人が多かった。
その混雑を見ると、次の電車に乗りたいと思ったが、きっとこの次の電車も同じく満員だろう。仕方なく少し無理に電車の中に入る。
「人多いな……」
電車の中は隙間なんて無いほど窮屈だった、しかし吾吏須にとってはそんなもの問題ではない。他にもっと大変な問題があった、それは目の前の啓太との距離。
「近い……ッ！」

吾吏須の今の体制は、二人の身長差のせいで啓太の胸に顔を押し付けるような形だ。それはあの日を思い出すには充分すぎた。
あの日もこうやって啓太の顔が近くにあり、そして身体から温もりを感じていた。また鼓動が高鳴ってしまう、どうか気付かれないように必死に鼓動を沈めようと別のことを考える。
しかし、それでも啓太の存在が気になってしまう。こんな至近距離まで近付いたのは、あの日以来なのだから。
「さすがにキツイな」
「えッ……あぁ！　そうだな」
きっと啓太はこの理論的に少し不可能だと思ってしまう満員電車のことを言っているのだろう。しかし吾吏須はこの至近距離の方が辛い。
電車の振動のおかげで鼓動には気付かれないかもしれないが、顔が赤くなりそうだ。実際、今も少し赤くなっている。
すると、背後に居る男が異様に吾吏須の身体にくっ付いてきた。これは満員電車なのだから仕方ないと思ったが、次の瞬間。

――は、なんだよこいつ！

急に吾吏須の下半身に触ってきたのだ。たまたま触れてしまった程度では無い、どう考えてもそれは意図的に触ったようにしか思えない触り方だった。
手の平を尻に当て、そのまま擦るように上下に動かされる。これが噂の痴漢というものだろう。
しかし、今まで痴漢をされるというのは女性にしか縁の無いものだと思っていた吾吏須は、この状況に対応できなかった。
この場から逃げ出したい。しかし、それは満員電車の中では不可能に近かった。だが、此処で痴漢だと叫ぶ勇気など吾吏須には無かった。
そもそも、男で痴漢にあうなど一般的にはありえない。たしかに、

女性ならばと信じてもらえるだろう。しかし男の場合はただ当たってしまったで済まされるかもしれない。
すると、吾吏須が何も反抗しないのをいいことに、痴漢はさらにエスカレートしていく。触っていただけの手が除序に激しくなっている。
こすり付けるような力、そして揉み解すように握られる。
「ひッ……！」
口から微かに零れた悲鳴、先ほどから吾吏須の様子がおかしいことに気付いた啓太は心配そうに声をかけた。
「どうした？　何かあったのか」
「な、なんでもない……なんでもないから」
啓太に心配をかけたくない、何より吾吏須のプライドが許さない。男で痴漢に会うなど、そんな恥ずかしいこと啓太には知られたくない。そんな思いから、吾吏須は啓太に嘘をついた。
納得したのか、少し疑問が残っているみたいだが啓太はそうかと小さく呟いた。
あと、少しで目的の駅だ、それまで少し我慢すればいい。そうすればこの満員電車からも、痴漢からも抜け出せる。
そう考えた吾吏須は、たとえ気持ち悪くても少しの間だけだと自分に言い聞かせる。
「君、可愛いね」
息がかかるほどの至近距離で囁かれた。その生暖かい空気が酷く気持ち悪くて悲鳴を上げそうになる。
尻を揉んでいた手は、制服の隙間から中へと新入していく。その感触の気持ち悪さに涙が出てしまい、身体はまるで凍えているかのように震えた。
「泣くほど嬉しいの？」
そんなことあってたまるか、と吾吏須は大声で叫びたかった。しかし、この場で叫べば啓太にバレてしまうだろう。そんなかっこ悪い、痴漢によって穢されている自分など吾吏須は絶対に見せたくな

かった。
　するとアナウンスが流れ、目的の駅に到着したことが分かった。これでようやく解放されると思ったが、どうやら痴漢はそう優しいわけではないらしい。
　痴漢は、尻を触っていた手とは反対の手で吾吏須の腕を掴み強引に外へ連れ出そうとした。
「このまま、何処かのホテルに行こうか」
　また耳元で囁かれ、ぐいッと近くまで引き寄せられる。
「はな――ッ！」
　離せと叫ぼうとした途端、視界に啓太の姿が映った。その時の啓太の表情は普通ではなかった、怒りと憎しみが丸出しの、感情を抑えるということすら忘れたかのような。
　啓太は右手で尻を触っていた腕を握り、左手の拳は震えている。何時から啓太が気付いていたのかは分からないが、その怒りをむき出しにした表情に痴漢も驚いているようだった。
　その痴漢の腕を握っている手の力はかなりのものらしく、痴漢は痛みで顔を顰めていた。
「ふざけんなッ！」
　まるで雄叫びのような声と共に、啓太は痴漢の顔面を殴ろうとしていた。
「止めろ啓太！」
　吾吏須が両手でも止めきれないほど、啓太の腕の力は大きかった。今までこれほどまでに怒っている啓太を見たことがあっただろうか。

　少なくとも、5歳からの付き合いである吾吏須もこんなに怒っている啓太は見たことが無かった。
「たのむ吾吏須、たのむから殴らせてくれッ！」
「アホかッ！　俺はこんなところでお前が暴力罪で捕まるなんざゴメンだ！」
「こいつはお前に！　だから正当防衛で認められる」

「駄目だって！　この場合、顔面を殴ったら過剰防衛になる！　てか、顔面じゃなくても！」
　必死に啓太を止めようとするも、どうやら啓太は痴漢を殴らないと気が済まないらしい。周囲の視線も集まっているので、できるだけ早く吾吏須はこの状況をなんとかしたかった。
「啓太、本当……止めろってば！　マジでこのままじゃ駅員来るし、これ周りから見れば俺等が加害者だからッ！」
「だけど……」
「俺はもう気にしてない、だから。止めないと本当に怒るぞ」
　すると、ようやく吾吏須の言葉に従おうと思ったのか、啓太は痴漢の腕を握っていた手を放した。
　すぐさま痴漢は逃げようと出口に向う、すると啓太とすれ違う時に微かに聞えた低い声。
「今度やったら、その時は殺す」
　それは、啓太のものだったが普段、吾吏須や愛達と話すような声ではなく、とても低く怒りが篭っている声だった。
「その、いろいろ言いたいことあるけど。とりあえずこの場から離れるぞ」
　吾吏須がそう言うと、啓太はあたりを見回した。するとようやく周囲の視線が二人に集まっていることに気が付きなるほどと苦笑をもらした。
　二人は、近くのデパートの階段の二段目に座っていた。此処は非常階段のようなものなので、めったに人が来ない。
「そんで、どうしてあの時……俺を止めたんだよ？」
　啓太は少し苛立っているかのような口調で話し始めた。それほど吾吏須に殴るのを止められたのが嫌だったのだろう。納得がいかないといった表情で吾吏須を少しキツイ視線で見る。
「お前が犯罪者になるのが嫌だった、それに……かっこ悪かったんだよ、男で痴漢にあうなんて」
　その吾吏須の声は、本当に痴漢にあってショックだったのだろう。

普段の強気な声とは裏腹にとても弱弱しいものだった。啓太も吾吏須が精神的にショックを受けたことを察したのか、申し訳なさそうな顔をした。
「あ……そうか、そうだよな。ゴメンよ、吾吏須のこと考えないで、自分の感情だけでつっぱしって」
ギュと拳を握り、それはきっと自分への怒りだったのか。啓太の表情には後悔の文字が映し出されている。
「いいんだよ、お前は俺を助ける為に殴ろうとしたんだろ。でもそれでお前が犯罪者になるのは嫌なんだ」
たしかに、悪いのは相手だ。痴漢は十分犯罪だし、訴えようと思えば訴えられる。
しかし、啓太に汚名を背負ってほしくない。そんな一心で吾吏須は今回の啓太の行動を止めた。いくら相手が悪かったとはいえ、それで暴力をふって怪我をさせれば啓太は十分犯罪者だ。
すると、啓太は吾吏須の瞳をジーッと覗き込んだ。そんな風に見つめられては顔が赤くなってしまう、顔の色が段々赤く染まっていくのを隠す為に吾吏須は下を向く。
「な、何だよ！」
「あのさ、吾吏須。俺は頭悪いから過剰防衛がどれだけ重い罪なのかは知らない。だけど――俺は、吾吏須の為ならあの時、犯罪者になっても良かった」
啓太が言ったその言葉は、とても意思のある言葉だった。顔を上げ、啓太の表情を確認する。
その啓太はふざけてなどいなかった、真剣そうな表情で吾吏須を見ている。その真剣な表情はたまにしか見せない表情で、吾吏須はどうにかなってしまいそうだった。しかし、すぐに啓太の言ったことを理解し大声で叫ぶ。
「お前、何！　馬鹿なこと言ってんだよ！」
自分のせいで啓太が犯罪者になってしまうなど言語道断、そんなこと吾吏須が許すはずが無い。

「馬鹿なことじゃ無い。俺は電車が止まった時にようやく吾吏須が痴漢に会ってるって知った。それまでずっと俺、気付けなくて」
すぐに『馬鹿なことだよ』と言い返したかったが、啓太の真剣な声に言い返せなかった。
それに、今回のことで啓太が気付かないのも無理は無いだろう、何故ならば吾吏須が必死に気付かれないように努力していたのだから。
「それは俺がお前にあんなかっこ悪いとこ知られたくなかったから！　気持ち悪いだろ、男で痴漢に会うなんてさ。そんなのお前にだけは知られたくなかった！」
段々自分の言い方が自虐的になってきているのを吾吏須は感じていた。
恐かったのだ、痴漢に会った吾吏須を啓太が軽蔑するのではないのか、少し避けたくなるのではないのかと。　穢れてしまった自分のことを嫌いになるのではないのかと。
すると、啓太は吾吏須の腕を握り自分の方向に引き寄せた。その腕の力はとても強いものだった、まるで何かを吾吏須に訴えようとしているかのような。
「吾吏須、俺はたとえ吾吏須が痴漢にあっても侮辱されても、どんなことがあっても親友だから。その、だからもう心配しなくたっていいんだよ」
はっきりとした口調、とても意思の固い声、そしてなにより啓太の声は『本気』だった。
その言葉はっきと親友の吾吏須へ向けられた言葉なのだろう。しかし、前のようにそれが辛いとは感じなかった。
もう、この言葉が友情だったとしても、もうどうでも良かった。そんなことよりも啓太の想いが嬉しくて、嬉しくて仕方なかった。
大切な人が自分のことを思ってくれる、それ以上の幸福があるだろうか。少なくとも今の吾吏須にはそれ以上の幸せなど無い。
優しい啓太の声に吾吏須は今にも泣きそうだった。否、もしかし

たらもう泣いているのかもしれない。乾いた唇を開き、啓太へお礼の言葉を述べる。
「ありがとう」
その声は震えており、ちゃんと発音できていたか分からない。微かに目からは涙が流れ出していた、それは痴漢にあった時の気持ち悪さや恐怖の時の涙ではなく、啓太にそう言ってもらった喜びの涙だった。
「あ、吾吏須！　大丈夫か？」
いきなり泣き始めた吾吏須を見て啓太が、もしかして自分が泣かせてしまったのかと不安になったらしくあたふたしていた。どうにかして慰めようと思考を巡らせているに違いない。そのあまりにも慌てていた啓太をの声を聞いて吾吏須は涙交じりの笑い声で喋った。
「大丈夫だよ馬鹿、ただ……嬉しかったんだよ」
だから心配するなと。すると、啓太も安心したかのか微かに笑みを見せる。
「そうか、俺……てっきり吾吏須にウザイとか干渉しすぎだって言われると思ってたから」
「お前の中の俺ってどんな存在なんだよ」
「うーん、一生逆らえない人で、勉強のできる憧れの人で、それで最高の親友かな」
なんだよそれ、と笑いながら啓太を肘でツンと突く。その吾吏須の表情には先ほどの悲しみは無く、喜びが広がっていた。吾吏須がようやく笑ったことに啓太も安堵のため息をついた。
「なぁ、吾吏須にとっての俺って何？」
「え……、えっと、弄られキャラで、憎いくらいに運動神経抜群で……」
――世界で一番好きな人
そう答えたかったが、吾吏須は息を飲んだ。

「一番の親友かな」
何故、そう言ったのか吾吏須は分からなかった。もしかしたらまだ、そういった感情を啓太が認めてくれるのか心配だったのかもしれない。
「吾吏須に親友って言われると嬉しい。それより早く買って帰らないと、きっと女王様がカンカンだ」
親友と言われて嬉しいのは吾吏須も一緒だった、同時に少し悲しくもあったが、今回は素直に喜べる。照れ隠しに少し俯いた。
「俺このデパートよく知らないから案内してくれよ親友」
啓太はあぁと呟き、吾吏須の腕を引っ張った。

第九の国　「約束」

買い物をした後、啓太が吾吏須のことを心配してくれて電車ではなくタクシーで帰ることになった。金は買い物代を少しちょろまかして（元々、愛も余ったら使っていいと言っていた）残りは啓太が払うことになった。

もちろん吾吏須は猛反対した、本来ならば啓太は電車で帰れるのだから、自分が払うと。

しかし啓太もなかなか譲らず、言い合いの果て吾吏須は敗北し啓太が払うことになった。だが吾吏須も納得できず何時か必ず返すと啓太に宣言してきた。

できるだけ料金を少なくという吾吏須の意見はなんとか了解され、駅前で降りることになっていた。そもそも、駄目なのは電車だけなので、それ以上は子供では無いのだから普通に歩ける。

「絶対に返すからなッ！」

タクシーから降りて、最初に発したその一言に啓太は苦笑した。先ほどからずっとこの言葉ばっかり飽きもせず言っているのだから。

「だから別にいいって」

「駄目だ、それは俺の美学に反する。それに、人の好意は黙って受け取れってんだよ！」

「それは吾吏須も同じだろ？　俺は別に払わなくてもいいって言ってるんだから」

「俺が納得いかないんだよ！　つーわけで、絶対に返す！　いいな！」

啓太はあははと笑っていたが、きっと吾吏須ならば地獄の果てまでも追いかけ絶対に返すだろう。それこそ夢に出てきそうなほど恐ろしい人相に違いない。

すると、啓太が何かを発見したのか近くの公園の大きな樹の所まで走っていく。すでに5時なので、あまり人は居なかった。

「吾吏須！　見ろよ、懐かしいの発見」
「あ、そういやこの近くだったっけ？」
　啓太は一目散に走っていった公園は、昔啓太と吾吏須が始めて出会った公園だった。都会では珍しい緑の生い茂った公園は、綺麗に管理されているらしく、昔とあまり代わっていなかった。
　たしかに、昔は無かった遊具なども少し増えたが、この大きな樹はまったく同じだった。この近くに二人が通っていた幼稚園があったのだが、もう１２年も前に卒園したのだからあまり記憶には残っていない。
「懐かしいな、もう啓太と出会ってから１２年も経つのかよ」
「その時よりは身長伸びてるみたいだな」
「あたりまえだッ！　ったく、昔はさ同じくらいの身長だったのに俺に許可無く抜かしやがって」
「それは俺のせいじゃないだろ」
　小学生になった頃も、よく身長で対決していたことがあった。しかしここまで体格に差が出たのはきっと中学生の頃だろう。何時の間にか３センチ、７センチと身長に差が出てきてしまった。
　吾吏須はとても悔しそうだったが、テストでは完璧に吾吏須が勝利していた。
　学年１位はあたりまえ、中学は進学校に行った方がいいと何度も周りに言われたが啓太と一緒の中学がいいということで、推薦も全て断った。
　そして、その頃から興味の出るものに差があった。吾吏須は勉強、とくに心理学に興味を示したが、啓太はスポーツなどに専念するようになった。
　しかし、二人の仲が薄れることなど無い。今でも二人とも同じシリーズのゲームが好きだし、何かと服の趣味なども合っている。
　すると、啓太が何かを思い出したのか苦笑した。
「そういえば、昔此処で……」
「苦い思い出を引きずり出すなッ！」

どうやら吾吏須も啓太の言葉で思い出したのか、顔を赤く染めた。
「あの頃は幼かったから、意味とかよく分かってなかったんだよ」
吾吏須の言っている幼い頃の思い出というのは、啓太と吾吏須が始めて会ってから小学校にあがる時のことだった。
一緒のクラスになれるか心配だった二人は、離れても友達でいようと、ずっと一緒だよという子供らしい『約束』をした。
それを言い出したのは啓太だったのだが、いったい何処で間違った知識を得てしまったのか、約束の仕方がキスをするというものだった。

――キスが約束の証って……今、考えるとすごく恥ずかしい。

たしかに、本当のキスの意味を知った時はファーストキスを男に奪われたことがショックだった吾吏須だが、今は微かに嬉しかった。
「本当に、何処でんなの知ったんだよ」
「たぶん、あんまり覚えてないけど結婚式とかだと思う」
たしかにやり方は結婚式に似ていたなと、吾吏須は思い出す。やり方は片方が『両方ともずっと一緒に居ますか？』と言い、もう片方が『約束します』という方法だった。まさに結婚式と同じやり方だ。
「考えてみると、ずっとその約束を守ってるんだよな」
「たしかに、今此処でこうやって話してるんだもんな……」
「でもさ、俺……今まで約束を守ってくれたの啓太だけなんだぜ」
ふと口にした言葉に、啓太は少し驚いたような表情をする。その啓太に気付かないで吾吏須はそのまま話を続けた。
「父さんと母さんと一緒に食事しようとか、一緒に遊園地行こうとか。一度もその約束守ってくれたこと無くてさ」
その言い方は吾吏須は意識をしていなかったのだろうが、寂しさが混じっていた。
共働きだった吾吏須の両親は、いくら約束をしても守ってくれる

ような人ではない。しかし、それは仕方ないことだと吾吏須は理解しているし、それを望んだりはしていない。
もしかしたら、こちらを見てくれるかもしれない。約束を守ってくれるかもしれない、という期待は幼い頃だけだ。今ではそんな期待を抱くことさえ馬鹿馬鹿しく感じてしまう。
「俺にとっての『約束』って、絶対に守られないものだったんだよ」
それを聞いた啓太はとても辛い顔をしている。ようやく啓太の様子がおかしいのに気付いた吾吏須は声をかけた。
「啓太？」
「俺は！　俺は……ッ！」
いきなり叫びだした啓太は何かを言いたそうに口を開く。
「俺は……絶対に吾吏須との約束守るから！　これからもずっと！何があってもこの約束だけは果たすから！」
ようやく口から出た言葉は、とても必死なものだった。
「啓太……お前」
「だから、そんな悲しそうな声出すなよ」
お前の声自体が悲しそうじゃないか、とツッコミたかったが吾吏須はしなかった。それよりも本当に自分は啓太に想われているのだなと、心の中で痛感していた。
今まで自分は、こんなにも啓太に想われているのに、その想いを返せただろうか。きっと啓太は見返りなど求めていない、しかし吾吏須はそんなものでは納得できなかった。
――与えられているのすら分からないなんて、馬鹿だよな
「啓太、俺だってその約束は守るから。それに悲しそうな声なんて出してねぇよ！」
「ゴメン……でも、なんか吾吏須すっごく寂しそうで」
「そ、そんなことねぇって……」
少しの沈黙が流れた、それはとても静かなもので、どちらも会話

を続けようとしたが話題が見つからないらしい。
すると、吾吏須は何を見つけたのか地面にしゃがみこんだ。
「吾吏須？　どうしたんだ」
「ちょっとな」
吾吏須は地面に所狭しと生えている葉っぱ――シロツメ草を摘んだ。

――あった、これだ。

立ち上がり、啓太の前に積んだシロツメ草を差し出した。それは普通の三枚葉のシロツメ草ではなく、四枚葉のものだった。
「これの名前、覚えてるか？」
「シロツメ草だろ、覚えてるよ……その、キスした日に教えてもらったものだから」
啓太はどうもその時のことが未だに恥ずかしいのか（それは吾吏須も一緒だ）ふいと顔を逸らした。
「そんじゃあ、この花言葉は覚えてるか？」
「花言葉……？　えっと、たしか……」
忘れてしまっているのか。まったく、といった少し呆れた表情で吾吏須は口を開いた。
「シロツメ草の花言葉は――『約束』だよ」
「お、覚えてたよ！　ただ、少し忘れたけで」
嘘だろと言う吾吏須に、啓太は苦笑した。昔から気になることは調べるようにしていた吾吏須は花の名前や花言葉をほとんど覚えていた。よく調べたものを啓太に教えてあげるなどしていた吾吏須は、きっと恋愛感情やそういったものは関係なく、啓太が喜んでくれるのが嬉しかったのだろう。啓太が何を聞いてきてもいいように、たくさんのものを勉強していた。
それが今の成績に繋がっているのだから、啓太には感謝しなければならないかもしれない。

――とは言うものの、男子高校生ですぐに花言葉が出てくるってどうよ。

そのあたりに関してはため息が出てしまうが、啓太が喜んでくれるので良しとする。

「あの時も、お前にシロツメ草を渡したの覚えてないのか？」

「覚えてるよ！　初めて吾吏須からもらったものだったし……それに」

「それに？」

「な、なんでも無い！」

何かを隠しているのは一目瞭然だったが、いったい何を隠しているのだろうか。しかし、こうやって啓太が吾吏須に何かを隠すのは珍しい事だ。もしかしたらあまり探られたくない事なのかもしれない。

「なぁ……まだ、俺と一緒に居てくれるか？」

吾吏須の静かな声は、今すぐにでも消えそうなほど小さかった。

やはり、現実で啓太の危機をまの辺りにして、この儚い夢の世界に居るのだから不安なのかもしれない。制限時間まであと一日、その間までに理想の関係にならなければいけないのだから。

もしも、失敗すれば。

――もう、約束が守れなくなるんだよな。

すると、啓太は胸に手を当て自身たっぷりな声で言った。

「あたりまえだよ、さっきも言ったとおり！　俺はずっと吾吏須と一緒に居る」

――ありがとう、啓太

心の中だけで、そうお礼を言った。まだ啓太に向かってはっきりとお礼を言うのは恥ずかしい、だからこそ、心の中だけでも素直にお礼を言いたいのだろう。

「そうか……そんじゃ、これ上げるよ」

すると、吾吏須はシロツメ草を啓太に差し出した。吾吏須にとってこれはきっと『約束』の証のようなものなのだろう。昔はキスだったが、今はさすがにそんなことできない。だからこそ思い出のシロツメ草なのだろうか。

啓太は笑顔で吾吏須の渡したシロツメ草を受け取った。その笑顔につられ吾吏須も微かに笑った。

きっと啓太も吾吏須の言いたいことの意味を分かっているのだろう。だからこそこうやって吾吏須に微笑みかけてくれたのだ。

「なぁ……けい――」

名前を呼ぶ前に、吾吏須の視界にはとても近い啓太の顔があった。そして唇に触れる柔らかな感触、それは昔に一回だけした行為とまったく同じだった。

今、現実で起こっていることが理解できない。ありえないくらい近い距離にいる啓太と唇に何かが触れる感覚。そうやくその柔らかいものが唇だと気付いた時にはすでに啓太の唇は離れていた。

それはきっと触れるだけのキスだったのだろう。それは体験した吾吏須でさえ分からなかった。それほど吾吏須は混乱していた。

――これって、つまりその……

キス、英語表記で『Ｋｉｓｓ』古式表記では『接吻』と書く。意味は国によってさまざまだが、日本では一般的に口と口でするのは恋人同士。

啓太と吾吏須はもちろん恋人同士ではない、たしかに吾吏須はそれを望んではいるが、まだその関係には達していない。

「吾吏須……俺は」

啓太のその声は、吾吏須にとってただの音声としか認識されない。それよりも今、目の前にある現実が信じられなかった吾吏須は呆然と立ち尽くしていた。
何か喋らなくてはと口を開けるが、何も言葉が出てこない。
「その、俺は吾吏須のこと……ッ！」
「あ、あああああのさ！　俺が女王様に荷物届けてくるから先に帰っててくれ！」
啓太の持っていた買い物袋を強引に引っ手繰り、すぐに学校への道のりを走っていく。
「吾吏須！」
名前を呼ばれた気がしたが、振り返ることなどできなかった。何故ならば心臓の鼓動がありえないほどに高鳴っている。きっと今、脈をはかったら１８０は軽く超えているだろう。
そして何より、顔が熟した林檎のように真っ赤に染まっている。身体が熱くてどうにかなってしまいそうだ。
今までこれほど早く走ったことがあるだろうかと思ってしまうほど爆走した吾吏須は、いったん止まり息を整えた。そして先ほどの行為をよく思い出す。
啓太の唇が自分の唇と重なった。そのことを考えるだけで吾吏須は壊れてしまいそうだった。
そっと、啓太の唇が触れた部分を指で触ってみる。すると、その時の柔らかい唇の感覚が鮮明に蘇ってきた。
「キスって……キスって何だよ」
何も考えられない、考えればそれだけで頭が爆発しそうだった。吾吏須はそのまま意思の無いうちに学校に着いていたが、その後いったいどうやって愛に買い物袋を渡したのかも覚えていない。
ただ、唇に微かに感じる熱を感じながら。

第十の国　「三月ウサギの狂気」

待ちに待った桜花祭当日、それは吾吏須にとって不満だらけだった。

まず、一つ目の不満というのが、今回の吾吏須の服装、吾吏須のクラスである2年5組は『アリス喫茶』をやることになったのだが、そこで吾吏須の役柄が少年アリスになった。

そして、愛がいろいろ衣装を調整したいということで、本日始めて衣装を着たのだが、その衣装というのがやけにフリルのついた可愛らしいものだ。

緑色の半そでのジャケットに、膝上5センチの半ズボンというまさに純情少年の元素たる服で、ふちというふちにフリルが豪華絢爛に付いている。

いくら室内とはいえ10月の季節では半そで半ズボンというのはかなり寒い。足は白と黒の縞々の長いソックスのおかげで守られているが、腕はそのまま露出しているた肌寒い。

元々はここまで可愛らしい服ではなかったのだが、愛の要望でこうなったらしい。もちろん吾吏須は講義したが全て却下された。他にこの衣装が切れる男子も居なければボーイッシュな女子も居ない為、仕方なく吾吏須はそのフリフリな可愛らしい服を着ることになった。

しかし、吾吏須の不満はそれだけには留まらなかった。これは誰のせいとも言えないのだが、吾吏須が一番楽しみにしていた松山のウサ耳姿、見た瞬間絶対に笑ってやろうと決意していた吾吏須は松山の姿を見て唖然とした。

三月ウサギの薄いこげ茶色の耳は、何故か悔しいほど松山に似合っていた。これは嫌味などでは無く、本当に似合っているのだ。

元々松山のスタイルが良いせいなのかウサ耳までも着（？）こなしている。どうして同じ可愛いもの同士なのにこうも差が出てしま

うのかと吾吏須は不満でならなかった。
「ったく、啓太も啓太でなんか似合ってるしさ。同じ男なのにどうしてこうも差が出るんだよ」
　呟くように愚痴を言った吾吏須は、お盆に紅茶を乗せて運んでいる白ウサギ姿の啓太を見る。その表情は真剣そのものだった。白ウサギの衣装はまるでタキシードのようなもので、後ろには尻尾が付いていた。それにはさすがの吾吏須も笑ってしまった。
　真剣なの啓太に限ったことではなく、このクラスに居る全員に感じられるものだった。
　理由は桜花祭という学校行事だからちゃんとやらないといけないという純粋な思いからでは無く、演劇部から借りた豪華な衣装を汚してはいけないという思いからだろう。
　吾吏須もさすがに汚してはならないと野生の感が言っている為、絶対に汚さないように必死だった。
「お客様の入店です。アリス達、準備をお願いします」
　メイド風女王様の格好をした愛の声を聞くと、すぐに吾吏須は入り口へと向かった。このアリス喫茶はやけに本格的なものだ。このアリス喫茶は全１０席でワンオーダーにつき１５分間居られる。最高３０分まで居られるのだが、一番安いそれほど量の無い飲み物の値段が４５０円とやけに高い。一番高いケーキがプチサイズで１００円だ。これではお客さんがやってこないのではと思うがその心配は無かった。
　コスプレ見たさにやってくる客や、その接客目当ての客が多くかなりアリス喫茶は大盛況だ。だが一番の理由は――
「分かりました、女王様」
　吾吏須はそう答え、入り口の目の前に立つ、すると愛の手によって扉が開けられカップルらしき男女二組が入ってきた。
「アリス喫茶にようこそ、異世界のお嬢さん、お兄さん。招待状はお持ちでしょうか？」
　すると、女性の方がピンク色の紙を吾吏須に渡した。これは入り

口で貰うものなのだが、そこには一番最初の予定時間が記入されている。
――えーと、このお二人さんは15分か。
もう招待状は使わないので、すぐさまポケットにしまい、深くお辞儀をする。
「今回はアリス達のお茶会に参加していただきありがとうございます。僕はアリスと申します、どうぞよろしく。それではお客様の席はこちらです」
この喫茶店が大盛況の一番の理由は、店員がその役になりきるというものだった。内装も完璧に作られており、よく一週間でここまで完成したなと関心してしまうほどだった。
その為、客も自分がまるでその世界に居るかのような感覚に陥る。
カップルを開いている席へと案内し、お辞儀をしてすぐに厨房と言う名のせまい飲み物を入れたりするスペースへと水を取りに向かう。するとそのには先客が居た。
「よう啓太……じゃなかったな、白ウサギさん」
「あはは、そうだなアリス」
「てか、本名が同じだからあんまり違和感ねーよ。本当に母さんを恨む」
吾吏須が苦笑すると、啓太も一緒に笑った。すぐに吾吏須は使い捨てのプラスチックの容器に氷と桜花学園の美味しいかどうか微妙な水道水を入れ銀色のお盆に乗せる。
すると。
「熱ッ！」
何かが派手に地面に叩きつけられる音と共に啓太の悲鳴に似た声が聞こえた。どうやらポットにお湯を入れようとして落としてしまったらしい、手には痛々しい火傷の痕があった。
「おい、啓太！　大丈夫かよ」
「だ、大丈夫……」
吾吏須はすぐに水道の水を流し、そこに啓太の手をつける。

「俺、保健室に言って火傷の薬貰ってくるから待ってろ！」
「いいって吾吏須、そんな大したのじゃ」
「馬鹿ッ！　大したことあっても無くてもちゃんと処置しないと駄目に決まってんだろう。大人しく待ってろよ！」
そう言うと、吾吏須はすぐに厨房から飛び出し教室のドアから出ようとする。
「アリス、どうしたの？」
「啓太が火傷したから保健室行く、あ……さっきのお客さんに水出しといて！」
扉を強引に開け、込み合っている廊下を全力疾走した。度々ぶつかってしまった人に謝罪をしながら目的の保健室のある一階に続く階段を下りていく、すると後ろから一番嫌いな人物の声がした。
「夢原吾吏須」
自分の名前をフルネームで呼ぶ人間は、一人しか居ない――松山だ。
「なんでしょうか先生」
早く保健室へ行きたいもどかしさと、一番嫌いな人物に出会ってしまった苛立ちのせいで、吾吏須の声は非常に低くなった。
振り返ってみると、何故か松山はウサ耳ではなく普段とまったく同じ服装だった。
「どうして先生、三月ウサギの衣装じゃないんですか？」
「私は教師としてやることがあるので先に抜けさせてもらった、最初にそう報告していたはずだが？　それよりも夢原、用があるので来なさい」
「後でじゃ駄目ですか？」
「今すぐにだ」
松山の声はまるで強迫のような感じがした。仕方ないと肩を竦め吾吏須は松山の後についていった。
連れていかれた場所は、普段あまり誰も立ち寄らない生徒指導室だった。中に入ると、埃っぽさに吾吏須は咳きをした。普段使われ

ていない証拠かそこら中に埃がたまっている。
薄暗い室内は少し不気味だった。唯一の明かりは窓から差し込む微かな光だけ、それもすでに午後三時という時間なだけあって本当に僅かだ。
吾吏須が先に入り、松山が後から入ってくる。ガチャンと扉をやや強引に閉めた松山は、普段とまったく同じ見下すような視線を吾吏須に向けた。
松山と二人っきりなどご免だ、一刻も早くこの場から離れたい吾吏須は苛々した声で言う。
「先生、早くしれくれませんか？　啓太が待っているので早く済ませてほしいんですけど」
「また白兎啓太か！」
普段の松山からは想像もできないような感情の篭った叫び声は、生徒指導室に響き渡った。この学園で松山がこんな人間らしい声を出すことを知っている生徒はいったい何％だろう。
きっと、吾吏須だけしか居ないのではないだろうか。そう思ってしまうほど松山が感情的な声を出すことは珍しい。
「本当に貴様等は仲がいい、とても硬い友情で結ばれている……だがそれが私を怒らせているとは思ってもみないだろう」
「あんた……何言ってんだ！」
その松山の姿はまさに恐怖だった、怒り狂った声、理性を失った獰猛な野獣のように荒々しい行動に吾吏須は唖然としてその場に立ち尽くしていた。すぐにこの場から離れなければいけないと全身が訴えているにも関わらず、まったく身体が動かない。
「夢原吾吏須、私は君のことをずっと愛していた」
時間が止まった、そう感じてしまうほど松山の言葉は以外すぎる。今まで燦々嫌味を言っていた人間から告白されれば誰だって驚くだろう。しかも相手は教師であり男だ、そんなこと誰も予想できない。
「何故、私が君を生徒指導室に連れてきたか分かるか？　あまりにも口が悪い君を調理する為だよ夢原吾吏須」

「調理って、何意味不明なこと言ってんだよ、この馬鹿教師！」
次の瞬間、松山は笑い出した。その笑い声は欲望と喜びが混じっているかのようだ。
てっきり馬鹿教師と叫んでしまったのを怒るかと思っていた吾吏須は、予想外の松山の高い笑い声に固まっていた。
「夢原、本当に君は素晴らしい！　私の性を震わせてくれる。普段私が君のことをどう思っているかなど知らないだろう？」
「気色悪い、知るか、てか知りたくも無い！」
「私はずっと、その罵倒する唇を奪ってみたいと思っていた。そして私が愛した結果、その唇から紡ぎだすのは私を求め快楽に酔う淫らな声だろう」
正直、この松山という教師は精神が怒れているとしか思えない、教え子に欲情するなど普通の教師がしていいことではないはずだ。
その時、吾吏須は始めの頃に帽子屋の言っていたことを思い出した。
『強気な子ほど、マゾヒスティックに調理させたくなるものです。それがサディスティックの性というものです』
つまり、この松山という教師は、何時も睨み反抗的な吾吏須を自分好みに調理したいという真性のサディスティックというわけだ。
どうやら帽子屋は間接的に松山が危険だと注意してくれたらしい。
――だったら、もっとはっきり言えよ！
すると、ガチャンという金属音が聞こえ、それが鍵を閉める音だと分かった時は既に遅かった。松山はゆっくりと吾吏須に歩み寄りながら、捕まえた獲物を見る狼のような視線を吾吏須に向ける。その舐めるような視線は正直言っていい気分ではないし怖い。
「松山……てめぇ、んなことしたら絶対に捕まるッ！」
「君にそんなことを言う勇気があるのか？　まぁ、私は両親の残してくれた財産のおかげで職を追われてもまったく問題無いのでね」
松山のその言葉は、此処で吾吏須を犯してもまったく問題無いという意味だ。すると松山は吾吏須にあと１０センチという所まで迫

っていた。すると。
「おい、吾吏須！　此処に居るのか！」
「啓太？」
扉がドンドンと叩かれた、外から聞こえてきた声は紛れも無く啓太のものだ。松山は食事を邪魔された野獣のような顔をしながら扉の外に居る啓太を睨んだ。
「よかったな、夢原……だが、残念ながらお友達は君を助けたくとも鍵が閉まって入れない。扉の外で普段の君からは想像もできないような淫らな声を聞くことになるだろうな」
そんなことはあってはならない、それは吾吏須にとって拷問に等しいのだから。否、むしろ松山にとってはそうなることを望んでいるに違いない。そうやって吾吏須の苦痛に歪む顔が見たいのだろう。
「この悪趣味野朗がッ！」
「さて、さっそくその口を黙らせてやろうか」
すると、松山は吾吏須に覆い被さり、吾吏須の身体は地面に打ち付けられた。松山の顔があと3センチという距離まで迫ってきている。こんな至近距離で松山の顔なんぞを見たくない吾吏須は目を瞑った。そうでもしなければ松山の欲望に満ち溢れた目に負けてしまいそうだった。
「離せ！」
必死に叫び胸をドカドカと叩いても、まったく松山には効かない。こんなところで力の差を見せ付けられるなど思ってもみなかった。こんなことならばもう少し筋肉を鍛えておきべきだと吾吏須は後悔した。
嫌気で目から涙が零れそうになるが、それでは松山を喜ばせるだけだと思い必死に泣かないように我慢する。
――啓太……ッ！
次の瞬間、信じられないことが起きた。凄まじい爆発音に似た音

がしたかと思ったら、薄暗い室内に光が差し込んだ。どうやら、その原因はこの部屋の扉が壊されせいらしい。
吾吏須と松山は扉の方を向き唖然としていた。そこには扉を壊した張本人であろう人物、白兎啓太がものすごい表情で立っていた。
「啓太……？」
「白兎……ッ！」
二人の声がちょうど重なった。どうやら啓太は鍵が閉まってした扉にタックルしこじ開けたらしい。啓太は駆け足で二人に近寄り吾吏須から松山を引き離す。
そして吾吏須の腕を強引に掴んだ、その手の力はものすごく吾吏須は痛みで顔を顰めた。隣に居る啓太の顔は怒りと焦りに満ちている。
「ふざけないでください……ッ！　いくら貴方が教師でも許しません！　吾吏須は、吾吏須は俺の……大切な親友です！」
大切な、の前に何か他のことを言おうとしていたことに、吾吏須は気が付いた。しかし、今はそれどころでは無い。啓太が教師である松山に対して本気で怒っている。
その怒りは、あの痴漢の時よりも凄まじく、殺気を漂わせていた。松山も啓太の表情に驚いているのか、唖然とした表情をしている。
「白兎啓太……貴様」
「先生には、絶対に吾吏須を渡しません」
それは、松山に対する啓太の宣戦布告だった。
高々に言った啓太は満足したのか、吾吏須の腕を引っ張り外へと連れ出した。それから無言のままあまり人の立ち寄らない物陰へと隠れた。
「良かった……吾吏須が戻って来ないから心配したんだ」
「啓太、ありがとう……本当に」
震えた声で、吾吏須は啓太に礼の言葉を述べた。本当に駄目だと思った時に助け出してくれた啓太を吾吏須はまるで王子様かと思った。ウサ耳も外しているようなので、十分そう見えてしまう。

しかし、そうなると自分の立場はお姫様だ、いくら事実とはいえそれは少し男として認められない。
「大丈夫か？　松山に変なことされなかった？」
「えーと、その大丈夫。あのさ、けい――」
「ちょっと二人とも！」
吾吏須が何かを言おうとした時、後ろから愛の声が聞こえた。振り返ってみれば、そこには少し怒っている愛が腰に手をあてながら立っていた。
「早く戻ってきなさいよ、いろいろ大変なんだからね。啓太は早く戻って吾吏須ちゃんは持ってくるものを早く持ってくる！　以上」
その声は、逆らうことを赦さない声だった。
「は、はい！　そんじゃ先に行ってるから後でな吾吏須！」
「ちょ！　啓太」
すると、啓太は愛と一緒に階段をあけ上がって行ってしまった。吾吏須もその場に呆然と立ち尽くしている訳にもいかず、保健室への道を爆走する。
吾吏須は混乱していた、二回も自分を助けてくれ、しかも昨日はキスまでしてしまったのだから。嬉しさのあまりこのまま死んでもいいとさえ思えてしまう。
だが、啓太の心が分からないのだ。確かに助けてくれるのは親友だからということで納得ができる。本人だって吾吏須のことを親友だと言ってくれている。しかしキスは別だ、キスは好きな人にすることで親友だからといってすることではない、ましてや男同士でなど。
それでは、啓太も吾吏須のことを好きなのではと考えるのは自惚れているのだろうか。
「分かんねーって！」
ようやくたどり着いた保健室の扉を開けると、そこに居た人物に吾吏須は絶句した――帽子屋だ。

第十一の国　「帽子屋の助言」

「吾吏須、お久しぶりですね。そしてずいぶんと可愛らしい格好をしてらっしゃる」

さわやかな笑顔と共にあさつした帽子屋を、吾吏須は頭を抱えながら見ていた。帽子屋は以前と変わらず煌びやかな衣装を身に纏っている。桜花祭だったからよかったものの、普通の時では絶対に入れないだろう。まぁ、入れないのならば別の策を考えてくるだろうが。

「何でお前が此処に居るんだよ！　てか先生は！」

「さぁ？　私は知らないのですが。それより吾吏須、いいのですか？　あと5時間で時間切れですよ」

帽子屋は保健室にある時計を指差しながら言う。その時計は既に4時を示していた、この夢の制限時間は本日午後9時までだ。

「……告白できねぇよ、そんな」

それは、声になるかならないかの声だった。あまりにも静かで今すぐ泡沫のように消えてしまいそうだ。

「不安ですか？」

帽子屋のその言葉に吾吏須は小さく頷いた。いくら啓太が守ってくれようと、想ってくれようと、それは『親友』に対するものだ。啓太に対する裏切り、それは吾吏須にとって絶対にあってはならないこと。

「いいのですか？　このまま夢から目覚めれば、この夢は『悪夢』になりますよ？」

「分かってる！　そのくらい……分かってる」

吾吏須の声は悲痛に満ちており、最後の声は聞こえないほど小さかった。帽子屋はただただ悲しそうな吾吏須を見ていることしか出来ず、笑顔には少し悲しみが混じっていた。

目は、迷いを現していた。それは普段の吾吏須は見せない、とて

も弱弱しいものだった。すると帽子屋は近くにあった椅子に座り、まるで独り言のように喋り出した。
「人はやって後悔するよりも、やらずに後悔するのがショックが大きいんですよ」
「帽子屋……」
低い声は優しさに満ちておりとでも穏やかで、父親のようだと吾吏須は思った。その優しい声に吾吏須は帽子屋の名前を呟いた。
「此処で終わりにしていいのですか？　このまま終わればその先に待っているのは『悪夢』ですよ、それに――」
一息ついて、帽子屋は吾吏須の顔をじっくり見る。
「白兎啓太は貴方にこう言ったはずです『どんなことがあっても親友だ』と……もしも告白をし拒絶されるのを恐れるのならば、それは白兎啓太への『裏切り』ですよ」
今までずっと、啓太に告白することが裏切りだと思っていた、しかし本当は違ったのかもしれない。啓太に告白をして拒絶されるのではと考えることが『裏切り』だったのだ。
本当に啓太を信じているのならば、本当に啓太を想っているなら、愛しているなら――拒絶されることを恐れずに、親友の言葉を信じるべきではないのだろうか。
「ですから、信じてあげなさい。親友を、一番愛しい者を」
帽子屋のその言葉は、吾吏須を動かすのには充分だった。吾吏須は頷き小さく呟く。
「……そうか、そうだよな」
その言葉は帽子屋に言ったものではない、吾吏須が自分自身に言い聞かせた言葉だった。それは先ほどの弱弱しいものとは裏腹に呟いているはずなのにとてもはっきりとした、自分の進む道を決めた意志の強い声だ。
吾吏須は近くにあった救急箱を採り、扉へと向う。そして振り返ると、帽子屋を見ながら先ほどの迷っていたのが嘘のような目で言った。

「ありがとうな、帽子屋！」
そして、勢いよく扉を開け啓太の居る教室へと走り走り出す。それを後ろで見ていた帽子屋は呟いた。
「頑張ってください。夢の国へと迷い込んだ、子猫ちゃん」

第十二の国　「タイムリミット」

それからすぐに教室に戻った吾吏須は啓太に火傷の処置をし、熱いものは全て変わってあげた。啓太は火傷ごときに大げさだと言っていたが、吾吏須はこれだけは譲らなかった。

啓太はあまり納得していなかったが、それでも吾吏須は意地をはっていた。そしてようやく終了時間の5時を迎えた。

「はーい！　皆、お疲れ様ーこの後は校庭で何かあるみたいだから予定の無い人は残ってなさい。そんでその後は今日稼いだお金で打ち上げよー！」

愛がメイド風女王様の衣装のまま、椅子に足を乗せ高々に叫んだ。クラスの全員はおーという掛け声と共に廊下に出た。

「啓太！　ちょっと話あるから来てくれないか？」

「へ、いいけど。此処じゃ駄目なのか？」

「あいや、その――大切な話だからさ、あんまり外部に漏れたくないんだ」

「そうなのか、そんじゃあ」

吾吏須は多少強引に啓太の腕を引っ張った、そして何処か二人きりになれる場所は無いかと探す。すると体育倉庫が目に入った。体育倉庫の扉を開けると、とても埃っぽく二人とも咳きをした。

薄暗いそこは、外の微かな明かりによって青白く照らされていた。いきなり体育倉庫へ連れてこられた啓太は少し戸惑っているらしく、キョロキョロと辺りを見回していた。

「吾吏須、なんで体育倉庫なんかに」

「啓太！」

いきなり雄叫びに近い叫び声を出した吾吏須にビックリした啓太はその場で固まってしまった。呼吸を整え、そして啓太の顔をじっと見つめる。

「そのさ……こんな体育倉庫なんてベタだと思う！　きっとこの後

お前は俺を突き飛ばすと思う！　それでもいい、その後俺をどれだけ罵ってもいい。だから聞いてほしい！」
今までずっと想っていた、こんなことはいけないことだと理解していた。15歳の時からずっと心の中に溜めていた切なる感情、一生叶わないと想っていた。
それは啓太にとっては迷惑かもしれない、そんな俺を啓太は受け入れてくれるかもしれない。それでもずっと言いたかった言葉。
啓太と向き合い、そして近付いていく。そして啓太の肩を掴んだ。
「ずっと……ずっと俺は啓太のこと好きだった」
昔とかなり差が出てしまった身長、それを縮めるかのように吾吏須は背伸びをし、そして。
「愛してる」
この3年間分の想いを込めた言葉と共に、吾吏須は啓太の唇に自分の唇を重ねた。それは重ねるだけの浅いキス、それでも吾吏須は満足だった。
ずっと溜めていた想いを啓太に告げ、このままこの夢から目覚めてしまってもいいとさえ思えてきてしまう。ゆっくりと唇を離し目を瞑り次に来る衝撃に供える。
このまま啓太に突き飛ばされても、それでもいい。拒絶されても、それすらもいいだろう。ちゃんと自分は啓太を信じることができたのだから。
しかし、次にきた感覚は突き飛ばされる感覚でもなければ、啓太の吾吏須を拒絶する言葉でもなかった。
――え……ッ！
それは、望んでも決して手に入らないものだと思っていたものだった。唇に触れる柔らかな感触、目を開ければ目の前には啓太が居た。
そのキスは先ほどの浅いものとは比べものにならないほど深いもの、渇望するかのように激しく求めているキスに、吾吏須は身体全身が熱くなることに気が付く。

ようやくそのキスが啓太のものだと気付いた時、吾吏須は本当に死んでしまいそうなくらい嬉しかった。嬉しさで人が死ぬのならばきっと吾吏須はすでに死んでいるに違いない。
啓太のガッチリとした腕が、吾吏須の身体を包み込み、それはとても安心できる温かさだった。ようやく深いキスから解放された吾吏須は啓太の顔を見た。
「吾吏須……」
その吾吏須の名前を呼ぶ声は、愛しい者を呼ぶ甘く優しい声。腕は一生吾吏須を離さないと宣言しているかのようにギュっと強く抱きしめていた。
「俺も、俺も吾吏須のこと……好き」
それは、ずっと吾吏須が求めてきた言葉だった。一瞬これは幻なのかと思ってしまう、しかし啓太から伝わってくる体温が真実だということを教えてくれる。
「俺、ずっと……吾吏須のこと好きだった。今、こうして俺の手の中に居るのが信じられないほど」
「啓太」
「あのな、俺はすごく前から吾吏須のこと好きだった。本当は、吾吏須の親友でいるのが辛かった。だって吾吏須は俺のことを『親友』として見ていて、『恋愛対象』とは見てくれてないんだって思ってたから」
それは、吾吏須が今まで思っていたことと一緒だった。啓太の自分への感情は『友情』であって『恋愛対象』ではないと思っていたのだから。
「抱きついた時、否定されたのは辛かった。吾吏須に嫌われたのかと思って……キスした時も、吾吏須が学校に荷物届けなければきっと俺は恐くて逃げてたと思う」
今まで想いが通じなかったのは、常識という壁が二人の考えを作っていたせいなのだろう。男同士だからありえない、相手は男だから気持ち悪いと思われるかもしれない、親友だと思われてるから恋

をするのが辛い。
――同じだったんだ。啓太も
「そんなの、そんなの俺だって同じだ！　お前の優しさが辛くて、お前の俺への友情が辛くて！　お前が俺のことを親友って呼ぶ度に辛かった……ッ！」
　すると、啓太の目から大粒の涙が零れ落ちた。
「ど、どうした」
「嬉しくって、吾吏須が俺のこと好きだなんて。そんなのありえないって思ってたから」
　それは吾吏須も同じだ、まさか啓太も自分のことが好きだったなんて。それは夢のまた夢、神様の力でも使わければ叶わないことだと思っていた。
　しかし、今自分を抱きしめてくれている温もりが、これは本物だと、真実だと教えてくれていた。
「俺の想いは真実だぜ」
「うん、分かる……今俺の腕の中に吾吏須が居る」
　すると、先ほどよりも一段と啓太の腕の力が強まる。吾吏須も啓太の首に手を回し抱きつく。
「いやはや、お見事ですお二人とも」
　急に聞えたその声に、吾吏須は驚いた。しかし何故か啓太も驚いているらしく声のした方に振り向いた。するとそこにはスマイル１００％の帽子屋が立っていた。
「帽子屋！」
「帽子屋さん！」
　見事にハミングしたことよりも、何故啓太が帽子屋のことを知っているのかが不思議でならなかった吾吏須は啓太の顔を見る。
「ななな、なんで啓太まで帽子屋のこと知ってるんだよ！」
「それは私からお話しましょう」
　混乱している吾吏須に帽子屋は爽やかな声で言った。
「実はですね、白兎啓太にも同じく試練を与えていたのですよ『一

週間以内に夢原吾吏須に告白されなければ、また昏睡状態になる』とね。私は夢原吾吏須が薬を飲んだ後、白兎啓太の意識の中に入り込みました。そしてこの世界、夢原吾吏須の夢へと誘導し、試練を与えた」

ということは、今現在、吾吏須の目の前に居るのは夢の世界の白兎啓太ではなく、現実の『交通事故にあった白兎啓太』というわけだ。

「それじゃあ、今俺の目の前に居るのは現実の啓太？」

「えぇ……そうですよ。ね、白兎啓太」

帽子屋が啓太に話をふると、啓太は少し慌てながら頷いた。

「忘れ物を取りにいった吾吏須を待ってたら急に目の前が暗くなって……それで帽子屋さんに今回の試練の説明されたんだ。その時は俺が交通事故にあったなんて嘘だと思ったけど……」

たしかに、いきなり出あった人物に貴方は交通事故に会いましたなどと言われて信じれる人間がこの世界に居るだろうか。少なくとも吾吏須の見てきた中には居なかった。

「というわけです、分かりましたか？」

まるで子供に問いかけるような喋り方に吾吏須はなにか納得できない気がした。子供扱いされるのは嫌だ、しかしそういう人間にかぎって子供なのだ。

「それでは、ご褒美を与えなくてはなりませんね」

そういえば、と吾吏須は最初の頃、帽子屋に言われたことを思い出した。理想の関係になれたならば、この夢は幸せな夢になると。

「お二人を現実に帰してあげましょう」

それに吾吏須は意義を唱えた。

「でも、啓太は意識不明なのに！」

回復する可能性は１％未満、それなのに目覚めさせるなど、それこそ神の業というものだ。

「死んではいないのならば問題ありませんよ、私にできないことは死んだ者を生き返ることと、人の想いを捻じ曲げることだけ。それ

以外のことならば超常現象だろうと引き起こしてみせます」
自信高々に宣言した帽子屋に、吾吏須と啓太は唖然としていた。世の中には本当にすごい人が居るのだと。理論的な吾吏須は多少納得できない所があったが、啓太と一緒ならば文句は無いでしょと言われそうで黙っていた。
そしてなにより、あの薬が本物だったので、いくら言っていることや服装が意味不明でも信じてしまう。
すると、帽子屋はポケットの中から銀時計を取り出した。
「それでは……時間切れまであと3時間ほどありますね。現実に戻ったらきっと啓太さんは重症なので、やることはさっさとやっちゃってください」
帽子屋のその言葉に吾吏須は顔を真っ赤に染める。啓太は横で？マークを浮かべているが、この言葉の意味を理解した吾吏須はギロッと帽子屋を睨んだ。
「あはは、吾吏須は威勢がいいですね。それではお幸せに」
すると、帽子屋は頭の帽子を取りお辞儀をすると、消えてしまった。毎回、よくわからない魔法のようなことしでかして、人を驚かせることには長けているようだ。

第十三の国　「相思相愛」（前書き）

※注意※
このお話は性的表現を含んでおります。
苦手な方はこのお話は飛ばして、次のお話から読んでください。

第十三の国　「相思相愛」

体育倉庫に残された二人の間には少しの間、沈黙が流れた。
「あのさ、吾吏須……やることって何だと思う？」
その啓太の純情さに、吾吏須はつい口ごもってしまった。１７にもなってあの意味が理解できないのは、天然だからだろう。
「えーと、つまりだな。現実に戻ればお前が重症で動けないから……動ける今のうちにセックスでもしろってことじゃないの……か？」
吾吏須の言葉を聞いたとたん啓太は先ほどの吾吏須とは比べもの

にならないほど顔を赤くした。何か言おうと口を開いているが何も出てこないらしい。
「だ、だからさ！　その、するのか？　俺と……その、セックス」
こうまで啓太が純情だと吾吏須まで言うのが恥ずかしくなってきてしまう。するとぎこちない手つきで啓太は吾吏須を抱きしめた。
「吾吏須がいいなら、俺はいいよ」
「お、おう！　あたりまえだろ。その俺だって思春期だし、お前とその……やってみたいなーなんて考えたことだってあるし」
「吾吏須……その、俺きっと理性を抑えられないかもしれないけど、それでもいいのか？」
「い、いいに決まってるだろ……その、俺だって無理だと思うし」
「……ッ！　吾吏須」
優しく吾吏須の名前を囁くと、啓太はゆっくりと吾吏須の身体をマットの上に乗せ、その上に覆いかぶさる。そして、またさっきと同じように唇を重ねた。
「ふ……ッ、んぁ」
重ねるだけのキスを何回か繰り返した後、ゆっくりと啓太の舌が吾吏須の口内へと忍び込んでいく。その感覚に吾吏須は身体をビクッとさせた。啓太の舌が吾吏須の舌と絡んできて、それに合わせて吾吏須も自分の舌を啓太の舌と絡め始めた。
そのキスは、まるで今までの二人の想いを埋めるかのように深く濃いものだった。無意識のうちに吾吏須は啓太の首に手を回し、啓太は吾吏須の身体を抱きしめた。いつの間にか吾吏須の頬は、啓太のものと吾吏須の唾液が混ざり合ったものが唇の隙間から流れ出している。
とても長いキスだった。ようやく唇が離された時、二人の唇からは透明な唾液が糸を引き、それは灯りに照らされ輝いていた。
「吾吏須、脱がしていいか？」
啓太がそう尋ねると、吾吏須は顔を赤くした。
「そんなの、わざわざ聞いてくるんじゃねーよ。馬鹿」

「ご、ゴメン……」
すると、啓太は吾吏須の纏っていた制服を一枚一枚脱がしていった。ブレザーを脱がし、そしてその下にある薄いシャツのボタンを外していく、それすらも吾吏須は厭らしく見えてしまう。
全てのボタンが外し終わると、吾吏須の普段あまり日に当たらない白い肌が服の間から見え隠れした。その肌はとても綺麗で滑らかだ、きっと女性でもここまですばらしい肌の持ち主はそう居ないだろう。
啓太はその肌に腕を滑らせ、まるで繊細な硝子細工を扱うかのように丁重に撫でた。それがくすぐったいのか吾吏須は身を捩じらせた。
「吾吏須、かわいい」
「か、かわいいって何だよ！」
吾吏須が言い終わらないうちに、啓太は吾吏須の胸の真ん中にある小さな実を指で摘んだ。女でもあるまいに、そんなところを摘まれても感じないと思った吾吏須だが、次の瞬間。
「や……ッ」
急に刺激が走り、その快楽に微かな声を上げた。その女のような甘い声に、出した本人である吾吏須も驚いていた。
「気持ちよかった？」
「ち、違う……ッ！　そんなんじゃ、そんなんじゃない……と思う」
段々、最後が小さくなっていくのが吾吏須にも分かった。すると何がおかしいのか啓太が微かに笑った。しかし此処で睨みかえすのもなんなので、吾吏須は早くしろとせがんだ。
すると、啓太は吾吏須の純白の肌に唇を寄せた。そして強く肌を吸うと、そこに赤い花びらのような跡が残った。それを啓太は腰、胸、そして首へと吾吏須は自分のものだと主張するかのようにつけていく。
その跡を付ける度に吾吏須は甘い声を漏らした、それが聞きたいが為に啓太は跡をつけていくようにも感じる。

そして、とうとう啓太は下半身を脱がそうとした。ベルトを外し、ズボンと下着を一緒に下げていく、すると吾吏須のペニスが姿を現す。現在の吾吏須の姿はシャツをはおっただけの無垢な姿となった。

「ッ――――恥ずかしい」

あまりにも啓太にペニスを見られるので、吾吏須はたまらず顔を赤くした。その吾吏須の顔を見て何故か啓太までも顔を赤くしていた。

「吾吏須、触れるよ」

「だ、だから！　いちいち言わなくてもいいっての」

こう何度もこれからやることを言われるのは恥プレイに等しいかもしれない。否、たとえ啓太にその気が無くてもこれは一種の恥プレイだ、純情とはなんとも恐ろしい。

すると、啓太は吾吏須のペニスを握る。そこからは既に先走りが出ていた。すると、啓太は信じられない行動に出た。

「は、お前なに……して！　ぁッ！」

ペロリと、まるでアイスキャンディを舐めるかのように吾吏須のペニスを舐め始めた。今までそんなことをされたことの無い吾吏須は、その刺激に耐えられず声を上げてしまった。

たしかに、何回か自慰はしたことがあった。しかしそれも数える程度で、思春期によくある一時的な性欲でしかない。その行為をした後は何時も逸脱間に襲われ、あまり進んでしてみたいとは思わなかった。

だが、啓太との行為はまったく違った。身体に熱が篭り息が荒くなっていく、そして何より自慰とは違った快楽がそこにはあった。

「ひッ……ぁ、やめ、啓太！」

啓太の生暖かい舌がペニスに絡み、裏すじやカリの部分を強く舐められるごとに声を上げてしまう。そして、啓太がペニスを加えた瞬間。

「んぁ……ッ！」

その口の中に包まれると、吾吏須はそのまま啓太の口の中で射精

してしまった。その精液はとても濃く、かなり溜まっていた様子だった。
自分の失態に気付いた吾吏須はすぐに上半身を起こし啓太の顔を見る。きっとかなり苦いはずだ、すぐに吐き出してもらおうと声をかようとし口を開けた。
しかし、その時何かを飲み込むゴクッという音がした。まさかと思い啓太の顔を上げさせると、口に微かに精液が付いていたが吐き出す様子は無い。
「啓太、お前まさか……飲んだ？」
「え、うん」
何事もなかったかのように返事をした啓太に吾吏須は呆れていた。いきなりフェラチオをしてきたり、しかも次はその精液を飲んだりと、本当に吾吏須を驚かしてくれる。
「馬鹿！　何そんなもん飲んでんだよ！」
「その、吾吏須のだって思ったら以外と飲めた」
「俺のだって……あーもう！」
すると、吾吏須は何を血迷ったのか啓太を押し倒した。
「俺だけ脱ぐってのフェアじゃないだろ？　啓太も脱がしてやる」
「え、ちょっと吾吏須？！」
吾吏須は啓太のベルトのバックルに手をかけカチャカチャと外していく。そして、ファスナーを下ろし中のペニスを取り出そうとした。
しかし、吾吏須は啓太の下着から取り出した途端、すぐに下着の中へと戻した。
「吾吏須、言ってることとやってることが矛盾してない？」
「う、うるせぇ！　たしかに、身長とか体格は啓太の方がでかいけど……なんでソレまでお前の方がッ！」
いくらなんでも、此処も差があるのは少し悔しかった。しかし、よく考えてみるとまだ勃起していない啓太のペニスが自分の中へと入ってくるのかと考えると、吾吏須は無理だと思った。

勃起していなくてもかなり大きいのだから、啓太のペニスはかなり大きくなるだろう。そんなものを自分のアナルに入れるのだから、物理的に不可能だと思ってしまう。
「それは俺に言われても仕方ないことだし……」
「ほんと、なんかいろいろ不公平だよな」
「あはは……あのさ、吾吏須。この先の行為やってもいいか？」
啓太は遠慮がちに聞いてきた。
「あ、あたりまえだろが。啓太だって、こんなところで止められないだろ」
そう言いながら、吾吏須は啓太のペニスのあたりを見た。そこは微かに勃起してきている、此処で止めると辛いのは男で吾吏須もよく分かっている。
「う、うん……それじゃあ」
苦笑しながら、啓太は優しく吾吏須をマットに寝かせる。
「その、馴らさないといけないよな……何か無かったっけ」
たしかに、元々アナルは性行為の為に作られたものでは無い為、濡れることは無い。ならば馴らさなければ裂けてしまうだろう。啓太は鞄の中を漁り、とある物を見つけた。
それは、喫茶店にあったシロップだった。たしか余っているのを啓太が貰ったことを吾吏須は記憶していた、まさかこんなことに使うとは啓太も思ってはいなかっただろう。
プチと、シロップの入っている小さなカップの蓋を開け、それを吾吏須の蕾へと垂らしていく。シロップで濡れた吾吏須の蕾はとても能管的だ。
シロップの冷たさに、吾吏須は身体を強張らせ、そして啓太の指が蕾の中へと入っていく感覚に微かな悲鳴を上げた。
「ひゃぁ……ん、ッ」
奇妙な感覚だった、異物が自分の中へと入ってくるのはあまり気持ちいとはいえない。それどころか気持ち悪いとさえ思ってしまう。
「吾吏須、痛くないか？」

「あ、う……ん。だい、じょうぶ」
しかし、嫌だと思っていたのもつかの間、急に身体に電撃が走ったかのような快楽に吾吏須は身体を硬直させた。
「あッ……やぁ」
「だ、大丈夫か？！」
「んな慌てるなって、大丈夫だよ……多分、前立腺に当たったんだと思う」
「ぜんりつせん？」
「そういう、刺激すると気持ちよくなる場所があるんだよ」
本当に何にも知らないんだな、と吾吏須が言うと啓太は少しむっとした。
「それじゃあ」
すると、啓太がまるで抉るかのように前立腺を刺激し始めた。もちろん吾吏須は驚き、同時に高い声を上げる。
「ば、馬鹿！　ひッ……いきなり、あぁ！　やるなぁ！」
しかし啓太は止める様子もなく、手加減無しで抉っていった。そのあまりにもの衝撃に吾吏須は声を抑えることも出来ず、泣き続けた。
啓太の顔は悪戯をしている子供のように笑顔だ。そして愛撫する指を二本に増やしバラバラに動かし始める。適当に動かしているように感じるが、その指はたしかに前立腺を嬲り吾吏須に快楽を与えていた。
そして、グチュグチュという粘着音は、聴覚までも犯していく。その音と、啓太から与えられる無限とも思える快楽に吾吏須は頭の中がぼーっとなっていくのを感じた。
「吾吏須……」
啓太は、吾吏須の蕾を指二本で開け、その中に新たなシロップを入れていく。その冷たさに吾吏須の頭はまた少し意思を取り戻したが、すぐに快楽が襲ってくる。
「んぁ……はぁッ！　やぁ……」

荒い息と共に、吾吏須の口から出される声は確実に啓太までもを熱くしていった。１０月の寒い時期の体育倉庫は少し寒いが、吾吏須からは熱が消えることは無かった。
「吾吏須ッ！」
啓太は吾吏須の上に覆いかぶさり、口付けを交わす。それはとても荒々しく野獣同士が求めあっているようだった。否、実際に二人はもはや野獣なのかもしれない、二人ともお互いを求め合い、快楽を貪る野獣――
その二人の姿は、月明かりに照らされ、いくら淫らな行為とはいえ美しく思ってしまう。
「吾吏須、入れていいか？」
唇を離された吾吏須はまた物足りなさそうだったが、啓太のその言葉に顔を赤く染めた。
「う、うん……けど、俺初めてなんだから！　その、優しくしろよ」
「それは、無理かもしれないけど。でも、できるかぎり……」
「なんだよそれ……」
「吾吏須の可愛さに我慢できないって意味」
啓太が囁くように言うと吾吏須は反論したそうに口を開いた、しかし欲情しているのは吾吏須も同じだった。
ようやく愛しい人と結ばれ、ようやく身体を重ねようとしている。それは吾吏須にとっても嬉しいことであり、一番望んでいたことだったのだから。
――本当、好きすぎてどうにかなりそうだ。
「なぁ、吾吏須……吾吏須は本当に俺と、せ……セックスしたいのか？」
「いきなり何言ってんだよ！」
此処まできて今さら何を聞いてきているのだろうか。
「なんか、吾吏須が無理してるんじゃないのかって思っちゃって」
たしかに、不安なのかもしれない。それは吾吏須だって同じだ、もしかしたら啓太に無理をさせてしまっているのではないのか、求

めているのは自分だけではないのかと。
片思いの時期が長かったせいなのか、啓太は絶対に自分のことなど好きではないと思っていたせいだろう。それはきっと啓太も同じことかもしれない。
「無理なんかしてねぇよ、俺だって……俺だって！」
すると、吾吏須は自分から啓太の唇に自分の唇を重ねた。それは触れるだけの軽いキスだったが、啓太の温もりを求めているようなキスだった。
「俺だって……啓太のことが欲しい」
「吾吏須……俺、きっと早くイってかっこ悪いかもしれないし、一人よがりになるかもしれない。でも――吾吏須が欲しい」
その言葉は、互いに相手を欲している証拠。二人はまたキスをした。そして、吾吏須は自分の蕾に何か熱いモノが押し付けられているのが分かった。
次の瞬間、ジュブという音と共に痛みが襲ってくる。
「痛ッ――」
その苦痛に、吾吏須は悲鳴を上げた。ズブズブと中に啓太のペニスが入ってくるのが分かり、身体が自然にその異物を締め付け、それに啓太は顔を顰めた。
異物の入ってくる感覚に吾吏須は息を止めたままだった。ようやく啓太のペニスが全て吾吏須の中に納まり、啓太が安堵の息を吐く。
「吾吏須、全部入った」
そう言うと、啓太は吾吏須のピンク色の頬に優しくキスをする。吾吏須は中で啓太のペニスがドクドクと脈をうっているのが分かる。その感覚に自分の中に啓太が居るのだと吾吏須は実感した。
「はぁ……ッ！　はぁ……ッ！」
吾吏須の額からは、身体の中に啓太のペニスが入ってくる痛みで汗が出ていた。荒く息をしながら、啓太を見る。
「けい、たぁ……」
まだ呂律が回らないらしく、虚ろな目で啓太を見ているは吾吏須

は、また自分から啓太にキスを求めた。啓太もその想いに答え、吾吏須に深く熱いキスを落とす。
「大丈夫か？　吾吏須……辛いなら、やめよう」
あまりにも辛そうな表情をしている吾吏須を見て、啓太が唇を語りかける。性行為が目的で作られていない為、吾吏須はかなりの痛みを伴う。
しかし、吾吏須は何かを言おうと口を開け、擦れた声で必死に喋る。
「……からッ！」
「吾吏須」
「大丈夫、だからッ！　俺は大丈夫、だから……だから啓太も我慢すんな」
とても入れたばかりで辛いはずなのに、吾吏須はそう言った。これほど辛くても吾吏須はやはり啓太が好きだ、だからこそ啓太にも我慢をしてほしくない。
今までずっと、我慢を強いられていたはずだから。その大変さは吾吏須も分かっていたし、体験していた。常識が二人の壁を作っていたから、その壁を壊しようやく想いが伝わったのだから。
「吾吏須……分かった、我慢しないから。ありがとう」
すると、啓太はゆっくりと動き出した、やはりゆっくりなのは吾吏須への配慮なのだろうか。その動きに吾吏須は内臓を引きずり出されるかと思った。
しかし、段々とその苦痛が別のものに変わっていくのが分かった。それは啓太のペニスが前立腺を刺激した時、吾吏須の身体に稲妻が落ちたかのようにすさまじい快楽が体中を駆け回った。
「ひゃぁッ！　んぁ、はッ！」
その快楽は、今まで味わったことのない道の快楽だった。ペニスを弄られるのとはまた違ったその感覚に、吾吏須は声を上げられずにはいられなかった。
啓太が動き前立腺を付く度に吾吏須は声をあげ、その快楽に意識

を持っていかれそうになるのを必死に堪えた。啓太の肩に抱きつき、必死に意思を保とうとする。
しかし、そうすると自分の腹と啓太の腹との間にペニスが押しつぶされる形になり、さらに吾吏須を追い込んでいった。
「ん……ぁ、はぁッ！　けい……たぁ！」
段々早くなっていく動きに、吾吏須の息はさらに荒くなり、啓太も少し辛そうだ。もうすでに身体の中を駆け巡るのは、伝わらない想いによる悲しみと苦痛ではない。
ようやく伝わった想い、結ばれたことに対する喜びと、啓太から与えられる快楽だった。
「あり、すぅ……ッ！　はぁッ！」
何度も口付けを交わし、そして抱き合う。啓太もそろそろイクのか次第に動きを細かくしていく。その動きに頂点が高まっていくのを吾吏須は感じた。
「啓太、啓太ぁ！」
次の瞬間、身体の奥の一番深いところを付かれ吾吏須はイってしまった。同時に身体の奥になにか熱いものが注がれ、それが啓太の精液だと分かると吾吏須はそのまま目を閉じた。
その注がれる感覚が、ようやく啓太と結ばれたのだと実感し安心したのだろう。吾吏須はその快楽と疲れで意識が遠くなるのを感じていた。
そして、啓太が何かをささやいたような気がした。
「吾吏須、愛してるよ」
それは、今までずっと望んでいた言葉だった。

第十四の国　「目覚め」

目覚めれば、そこはベットの上だった。重い瞼を開け、辺りを見回すとそこは自分の部屋、ようやく意識が戻ってきたのか吾吏須はベットから起き上がった。

戻ってきたのだ、現実に。自分の服を確認すれば、それは薬を飲んだ時と一緒の姿だった、近くには小瓶が転がっている。時計を見てみると、時間は9時１０分を示している。薬を飲んでからまだ１０分程度しか時間が経っていない。

「そうだ、啓太は！」

此処が現実の世界ならば啓太は入院しているはずだ、帽子屋は二人とも現実に帰してくれると言ったのだから、啓太は目覚めているはず。

吾吏須はすぐに、制服も着ないまま家を飛び出した。風邪をひくかもしれないと思ったが、そんなことを気にしている場合ではない、この目であの夢が真実だったのか確かめなければ。

病院に着いた頃は、すっかり疲れなど忘れていた。夢での苦痛がそのまま身体に出なくてよかったと思っている、もしもそのまま身体に出ていようものならば腰の痛みで走れなかっただろう。

啓太の病室は2階の内科病棟の２１３号室の窓側だったはず、夜遅いのに廊下を走るのはよくないと思っていたものの、そんなことは気にせず啓太の眠る病室へと走った。

「啓太ッ！」

扉を開けると、啓太のベットには数人の看護士と医者らしき人が立っていた。

「あ、夢原さんですよね」

「啓太は！　啓太は大丈夫ですか！」

看護士の中を掻き分け、吾吏須は啓太の眠るベットへと駆け寄った。そこには長い夢から目覚めた啓太の姿があった。

「吾吏須……、ただいま」
ようやく、本当に啓太が戻ってきた。ようやく現実へ一緒に戻ってこれた。
「馬鹿野朗、心配させんじゃねーよ。おかえりなさいだよ、こんちきょうが……」
そう、涙交じりで喋りながら吾吏須は啓太の体に抱きついた。その温もりが啓太のものだと思うと、安心してこのまま眠ってしまいそうになる。
その後、医者からの説明もいろいろあり、どうやらこのままの調子で回復すれば1週間程度で退院できてしまうらしい。それくらいならば、現実での桜花祭にも間に合うだろう。
啓太はまた、松山に怒られるのかと考えると気分が悪くなったが、啓太と一緒ならばどうだっていいと思えてきた。これからは、たくさん啓太の愛情に素直に喜ぶことができるのだから。
「それじゃあ、もうすぐお母さん達が来ると思うから。待っててね」
そう言って看護士と医者は全員、病室から出ていく。他のベットには誰も居ないので、この病室には吾吏須と啓太の二人っきりしか居ない。
すると、啓太の口が開いた。
「吾吏須、あのさ……ちょっと鞄取ってくれないか？」
「いいけど」
近くの啓太の私物が置いてある棚を見ると、そこには学校指定の学生鞄があった。それを取り啓太に渡す。
「たぶん……この中に入ってると思うんだけど、あった」
すると、啓太は鞄の中から少し萎れた四葉のクローバーを取り出した。その葉は微かに萎びていたが、色はとても綺麗な緑色をしている。
「先に吾吏須に告白されちゃって、俺からの告白まだしてないだろ」
「い、いいよ！　そんな改めて」
吾吏須が顔を赤めながら言う。

「いや、これだけはちゃんと言わないと。吾吏須、愛してる」
啓太がその言葉を言うと、吾吏須の顔はまた赤く染まっていく。やはり改めて言われると恥ずかしいものがある。
すると、啓太は吾吏須にクローバーを差し出した。
「あのさ、四葉のクローバーの花言葉って知ってるか？」
それは、あの大きな樹の下でしたキスの時と同じ台詞だった。あの時は吾吏須が啓太に聞いたので立場は逆転しているのだが、シロツメ草の花言葉は『約束』吾吏須が図鑑やネットで調べた時にはたしかにそう出ていた。
「当たり前だろ、花言葉は『約束』それがどうした」
「残念！　吾吏須もまだまだ勉強不足だな」
まさか啓太の口から勉強不足などという言葉を聞く日がこようとは、さすがの吾吏須も予想していなかった。勉強の成績は吾吏須はトップクラス、啓太は下から数えた方が早いというのに。
「で、なんだよ。その四葉のクローバーの花言葉は」
「えっとな、四葉のクローバーの花言葉は、一つは『幸福』そんでもう一つが――『私のものになって』だ」
その言葉に、吾吏須は固まった。どうして固まってしまったのか、その理由は啓太が自分よりも知識を持っていたことではない。あまりにもその言葉が嬉しかったからだ。
そういえば、と吾吏須は思いだす。たしかにシロツメ草の花言葉は『約束』だ。しかし、四葉の場合は
そして、啓太は優しく吾吏須の身体を抱きしめる、その啓太の胸に顔を埋めながら吾吏須は顔を赤めていた。
「吾吏須、俺のものになってくれるか？」
それは、普段あまり強気な姿勢に出ない啓太の独占宣言だった。吾吏須の身も心も全て私にくださいと、このクローバーにはそんな想いが込められている。
まるでプロポーズのようだ。否、啓太にとってこれはプロポーズなのかもしれない。

「――ッ！　あたりまえだろ！」
なるにきまっている、何処までも自分を独占していてほしい。そして自分も啓太を独占して、愛し続けるだろう。
「それじゃあ『約束』しよう」
それはきっと、あの時した、ずっと一緒に居ようという約束の仕方だろう。吾吏須は顔を上げ、啓太の顔を見ながら微笑んだ。
「そうだな、ひさしぶりにやろうか……」
「あぁ、それじゃあ……ごっほん！　えーと、夢原吾吏須は白兎啓太のものになると誓いますか？」
「誓います」
その言葉に、啓太もまた顔を赤めた。次は吾吏須の番だ。
「それじゃあ、白兎啓太は夢原吾吏須のものになると誓いますか？」
「誓います」
「どれだけナイスボディな姉ちゃんに告白されても絶対に浮気しませんか？」
「誓います」
そのやり取りに、吾吏須と啓太は少し笑った。そして、またお互いに相手の顔を見る。二人とも、すごく幸せそうな顔をしながら。
「それでは」
「誓いのキスを」
そうして、二人は唇を重ねあった。それは思い出のとても優しい約束のキス。

夢の世界で再会を果たし、ようやく想いが伝わった喜び。
まだ、物語は始まったばかり。想いを伝えあった二人は、これら二人だけの物語を紡いでいくだろう。

これは、夢の国で再会を果たした。とても幸せな二人の物語。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6981c/

夢の国のアリス

2010年10月8日13時58分発行